

ニンニク液の製法及効能

- 一、原料 蒜の根球 百二十匁
日本藥局方アルコール 一ポンド
- 一、器具 一升入硝子瓶 一本 壘口キルク 密封用蠟 新聞紙及紐
- 一、右蒜の根球をよく剥ぎて洗ひ、水を切つて置き、後にみぢんに細刻なり。
きざんだ蒜球を壘に入れキルクを口にさし、其上から蠟をかけ、尙ほ其上を新聞紙にて包みて
糸にてシバリ、縁の下などの冷暗所に貯ふ。
- 二三週間の後、蒜の精がアルコールの爲めに溶けて丁度お酒の色となつた時に用ゆるなり。
若し三週間しても溶けない時は、尙ほ氣永に放置す。
- 一、前項の如く出来上つたら、二號形カプセル五〇ヘスポイトに入れて左の通り吞む。
最初の一週間は一日に カプセル一個
次の週間は一日に カプセル二個

三週間は一日一回に カプセル三個

四週間は一週間休み

次の週間は又最初の如く一週間から再始す。即ち四週間に休むのは、長く連續服用しては、反つて効目の薄くなる虞あるためなり。

一、効能 要するた何病によらず、痼疾に大効あるばかりか、強壯劑に必適す。

一、大蒜（ニンニク）之を食すれば鬚髪を白くす。
癰腫、惡瘡、疼痛に効を奏す。

○胡麻油にニンニクの搗き汁を交ぜ、腫れたる所に貼れば忽ち治す。又肉食を消化す。痰を除き慢性病を驅逐す。眼病あるものは不可なり。
要するに、殺虫、祛痰が主たる効能なり。

妊娠の中毒

一、妊娠の持續長ければ遂に中毒を起すことあり。其中毒と見らるるものは、

- (1) 妊娠悪疽
- (2) 浮腫
- (3) 妊娠性腎臓炎
- (4) 子癇 (血圧上り、頭痛、眩暈、視力障害等が起る)
- (5) 妊娠性肝臓炎
- (6) 妊娠性皮膚病
- (7) 妊娠性貧血症

等であるが、子癇となれば全身痙攣を起し、意識は消失します。一見てんかんに類以す。

スツポンの薬効

- スツポンには「タウリン」と稱する治療的作用があつて、其合用も亦多いのである。故に
- 一、結核菌其他の病原菌に抵抗する特殊の免疫物質を造る。
- 一、造血作用を旺盛にする。

- 一、活潑なる喰菌現象により、病原菌が滅殺される。
- 一、新陳代謝を促進する。
- 一、肝臓を刺戟するから胆汁の分泌が盛んになる。随つて胃腸を健全にする。
- 一、食慾を増進する等である。

(アヲツツ ラフヂ)



膀胱加答兒

- 一、蝮の霜を耳カキーバイほどねりて、臍の下へ貼ると大効あり。
- 一、蠶顔の葉十枚ほど水三合で二合に煎じ一日量として三日間連用すれば効あり(但し多用有害)。
- 一、蚯蚓(ミミツ)の霜を一回四グラムづつ連用してよし。
- 一、木防己(アヲツツラフヂ)の鬚根を捨て、二

寸位に切て晒し乾し、煎用すれば大効あり。

骨接ぎ

- 一、骨折は、力限り引き伸ばし、又蝶番（關節）なれば力限り伸して原位置に接ぐなり。苦痛を思ふて、手加減するは後日のためにあらざるなり。而して鹽湯を拵へ、手拭に浸し、シボツテ湯のさめぬ内に暖める。後に木綿にて括つて置く。
- 一、骨折の時は前項の如く接いで、其外部へ山椒の葉（生がなければ乾葉にて可也）を酢にてねり、つけて、上を木綿にて括つて置けばよい。
- 一、鮓又は鱈をつぶして付けてもよし。
- 一、蟹の甲の中の髓や、足の中髓を取り、つぶして局部へつけて大効あり。
- 一、山藨を霜にして、生山芋を卸したものと共にねりて、骨折の上からつけてよし。其上を柳の皮にてつゝめば大によし。
- 一、骨接木（ニハトコ）の若芽や葉莖をすりつぶして上から貼つて置けば大効あり。またニハト

コの木皮、葉、莖、花等を水にて煎じ、患部を洗ふてよし。

一、黄蘗皮を粉にしてウドン粉少々とねり合せ、患部の外をつつんで置くもよし。

ホルモン

一、内分泌腺より生成せられ、血液内に分泌せらるる内分泌物をいふ。ホルモンなる語はギリヤ語の喚び醒すといふ意味の語から出たのである。

尙ほ内分泌の意味は分泌腺のみによらず、其内に來れる血管内に直接分泌して血液に混じ、体内を循環することを指していふなり。

（生活体内に於て行はるる化學的相關の内最も重要な一方面を有す）

化學的相關とは、化合物が或る組織細胞より組織液内へ與へられ、体内を循環しつつある間に他の組織機關に對し影響を與ふるをいふ。

覺醒素といふことは「ホルモン」とも書く。

一、腦髓の上面にある松果腺といふ内分泌腺は、生殖器の發育と密接の關係があつて、之が病氣

で、幼少の頃からその生殖器管が病的異常に發育するときは、之に伴つてその者の心身に二次的性徴も亦非常に早く現はれる。

防腐劑

過酸化水素水を種々な方法で、蒲鋒に塗り、以て防腐に用ひたことを發表せり。其効果最も多しといふ。一般飲食物に適用するとよい。

便秘 (小便不通)

- 一、鼠を霜にして、少しづつ臍の中に入れてよい。
- 一、朝起きがけに平臥して兩足を伸べ、左足をム字形に曲げ、次に伸ばして踵を疊の上に投げ出すこと一朝に三十回宛して七日もやれば通じがある。
- 一、便秘には左の療法あり。
- げんのしようこか干振の煎用。

○毎朝洗面後直ちに冷水をコップ一パイか又は鹽水一パイの連用。

○水飴に卵かハガキ大の板昆布の焼いたのを入れて食する。(但し熱湯をかけて其汁を呑むもよし) 以上は人の性質によりて同じからず、經驗すべし。

- 一、小便不通には、生蚯蚓をすりつぶしてウドン粉少しとねり合せ、臍の下へ貼ること。
- 一、同上には、枇杷の生葉を煎用すると大効あり。
- 一、同上には、ケヅラの葉を煎用すると大効あり、且つ膀胱破損にも同効あり。
- 一、三葉の根と大麥の煎用は便秘に効あり。
- 一、ホウレン草の常食は便秘を和ぐ。
- 一、センナ葉一匁に二合位の熱湯をそそぎ一日三回に用ゆ。(但し一時の下痢に終る人もあり)
- 一、鱈を常食とすれば便秘あり。
- 一、便秘には左の數種藥あり。

○木通をビールにて呑む。木クラゲの煮食又は煎汁を飲む。虎杖草の煎用。小豆と昆布を用ゆる。黒ウメモドキ(鼠李、クロベラ、ナベカウジ)の生實(未熟の時)を取り麻袋にて搾り、

食前空腹時に盃一パイを用ゆれば下劑となるのみならず、便秘と消化不良を治す。

(一日一匁―四匁を強火にて煎汁とするもよい)

一、便秘には、一日に二十分―三十分間下腹部を日光に晒すとよい。

一、同上には、枳根(テンボナシ、テンボコナシ)を食するとよい。又其の果實の軸を食せば酒毒を消すも多食を禁す。

(ヤマゴボウ)



一、生大黃一匁、芒硝二匁を熱い焼酒一碗に

泡化し服すれば、立どころに通あり。

一、山午莠(商陸、ヤマゴンボ)の根をすり

卸して、臍の上に貼れば便通あり。小便不通にも

効あり。

一、蝸牛三個を殼と共にすり下し泥状となし、ジャ

香少し計りを加へ、臍に貼し、手を以て下腹部を

効あり。

柔かく按摩すれば立處ろに通す。

一、田螺三個を鹽一トツマミと共に生の儘搗き碎き、臍下一寸三分の處に貼し、布を以て堅くホ

ウタイすれば立どころに通す。

一、オホベコの實七分乃至一匁位を適宜煎用すれば通じあり。

一、ドクダミとゲンノショウコ(土用に取つたもの)を煎用すれば便通あり。

一、小兒便通には、飴を水に溶かし、のませるとよい。また蜂蜜を少しなめさせても通す。

一、同上には、ソバ粉に砂糖を加へて與へてもよい。果物や野菜を多く與へよ。

一、便秘の時イケミ(勢責)して脱肛の如くなりたるには左の方法を施せ。

○椿の葉を自己の體に適ふ位に温めて、肛門の出た肉の上に數十度當てて押し込むとよい。幾

日も連続すれば出なくなる。一日朝夕二回のこと。

○枇杷の生葉があれば前項の如くすること。但し椿よりは少し軽くする。即ち一度に十五回位

すること。

○蛇退皮(霜のかゝらぬもの)を霜にして胡麻油とねり合せてつけること。

一、老人便秘の原因 食べた食物を胃から腸へ完全に送らぬから、遂に食物が腸の中に溜りて便秘をするやうになる。老人は糞便が腸の中に溜るから屢々下痢を起したり、傳染病にかゝり易くなる。バイ菌の所爲なり。

一、新鮮な野菜や果物が、弛緩した腸に良刺戟を與へて、便秘を治すもの也。

一、野バラ（野イバラ、クヒ）の實を秋の彼岸後に摘み取り、燒鹽と梅干の汁で漬けて置き、便秘の時に五六粒づつ食べます。

一、落稜草の根を選べ、便通ありて痔瘻を治す。

一、子供の便秘には、蕎麥粉を熱湯にてねり交せて煮た物を食べさせると効あり。

蛇の藥的効用

一、最近の學説を綜合すれば左の通り。何れも霜にして

○白蛇は癩病患者に最適す。 ○烏蛇は癩病及肺病に同上。

○縞蛇は肋膜炎及肺病に同上。 ○蝮は強壯劑中の最も上品なるもの。

○青大將は淋病及梅毒に適す。 ○山かがしは脊髄病に同上。

○地もぐりは胃腸病に同上。 ○蜥蜴はレウマチス及脚氣病に同上。

以上各種の應用は内服外用宜く考ふべし。昔は霜を一回に耳かき十パイを適度といへり。

一、スツポンは肺結核、肋膜炎、心臟病、胃腸病、其他精力の増進用に使はる。

蛇、蝮其他の咬傷

一、蛇や蝮に咬まれた時は、

○手早く乾柿（串柿でもよし）を嚙んで疵口につける。

○藍で染めた紺足袋を穿くと疵が軽い。

○白砂糖（黒砂糖でもよい）早くつける。

○夕顔の葉をもみつぶしつけてよし。

○鳳仙花の花を指でもみつぶしつけてよし。

- 百足や蜂にさされた時は、砂糖又は鹽をつけてよし。
- 蝮に咬まれた時にはアセブ(アセビ、アンプ、馬酔木)の葉をかんでつけてよし。
- 一切の毒虫にさされた時は白屈菜の汁をつけよ。
- 馬に咬まれた時には生栗をかんでつけ、若しなければ乾栗をよく咬んでつける。
- 動物に加へられた創痕には百足の油をつけてよし。
- 百足に刺された時には、蜘蛛をつぶして付けてよし。
- イカのシミは蛇毒を消すこと妙なり、乾して貯ふべし。
- 一、蝮にかまれた創口及其附近へ煙をつけて毒血を吸ひ出させて治癒せしめた人があるといふ。
- 一、江南草(ハブサウ)の葉の搾汁を塗布すれば、毒蛇に咬まれた時にも効あり。琉球のハブ毒蛇に特效あるために此の名あるなり。
- 一、蝸(支那のカツ)に刺された時は、枇杷の實を焼いて粉とし、胡麻の油でねりませ、貼布して大効あり。又百足の霜を油にてねり、つけて大効あり。
- 一、鼠にかまれた時は、ミソベキ草を煎じて其汁で洗ふこと。

一、蛇を石垣などより引出すには、白紙を以て握りて引出せば譯なく出るなり。

ヘルツ水の處方

一、ぐりせりん三〇瓦 七〇%アルコール三〇瓦 水一五〇瓦 之に苛性加里一瓦を落すべし。

糖 尿 病 (一名、胸筋レウマチスともいふ)

- 一、本病の素人検査は、砂地に尿せしめて蟻の群るか否を検すればよい。
- 一、連錢草、疳取草(カキドラシ)の葉莖を陰干して、約四匁を水三合に入れ二合に煎じ一日三回に分服す。
- 一、小豆、昆布、南瓜に砂糖を入れず、鹽から煮て十日間も連食すれば効あり。
- 一、楡木(或は同乾皮)を、一日に四匁を強火に煎じて用ゆれば本病の特效藥となるなり。
(健胃劑ともなる)
- 一、胡桃(クルミ)の實や南京豆を間食するとよい。

一、胡麻鹽、赤飯、海草類がよい。本病は美食は不可なり。
 一、玄米スープを作りて用ゆ。即ち玄米一合を炒り、水五合にて二合五勺に煎じ、一日に數度服用するなり。

一、本病には蜂蜜を食用すれば大効あり。砂糖味はあつても不可なし。
 一、本病は一名を「胸筋レウマチス」といふ。
 一、糖尿病藥 チアベトン 散、錠あり。

毒草と見るもの

- 一、ヒガン花 (石蒜、舌マガリ、マンジュシヤケ、ヤンメノ花)
- 一、キツネノボタン (同々蒜)
- 一、ドクウツギ (全部毒草なり)
- 一、トリカブト (烏頭、カブトギク、カブトバナ、ヤマカブト、ヤマトリカブト)
- 一、ドクセリ (芹葉鉤吻、大名ゼリ、オホベセリ) 東京にては盆栽に愛翫す。

(レイジンサウ)



(イヌホウヅキ)



- 一、ウラシマサウ 一、バイケイサウ
- 一、アラヤギサウ 一、ドクムキサウの種子
- 一、ホルトサウ (續隨子、テウセンヤナギ、トゲヌキ、コクドサウ、コハブ)
- 一、センニンサウ (大蓼、ダイレウ、タカタテ、ウシハコボシ、フツグサ)

- 一、ノウルシ。
- 一、キンギンボク。
- 一、ツタウルシ。
- 一、フヂウツギ。
- 一、コセウノキ。
- 一、馬鈴薯の芽は必ず除けといふのは、此芽の中に「ソラニン」といふ毒素を含有するからである。

毒除け法

- 一、ドクダミの葉莖又は根（乾いた物でも可）ヲモトの葉莖を煮出し、其汁にて芥子をねり、厚い布にぬりつけ二重に折り、鼻口を被ふて居れば、毒氣にあたることなしと古書に見ゆ。
（蛇鱗の吹く毒氣にも當らずといへり）
- 一、炭坑内の瓦斯のある處へ行くには酢につけた布片或は蜜柑の皮を含んで行けばよいといふ。
- 一、生姜は嘔吐を止め、痰を去り、魚や草の毒も解くなり。

- 一、アセボ葉の細末は、毒蛇の消毒に特效あり。
- 一、鳳仙花の種子は毒除けに特效あり。殊に白花の種子は魚毒除けに特效ありといふ。

凍傷

- 一、貝殻の霜と胡麻油をねりて塗布すればよい。
- 一、凍死者には（假死人）蕎麥粉を湯に溶きて吞ませ、そして藥火にて罌丸（女子は乳房と陰核の邊）を温めてやればよい。
- 一、葱の白根に茄子の蒂の干したるものを煎じてのめ。

トゲささりを除く法

- 一、咽喉にトゲささりたる時は、象牙にて患部の外側を撫でると自然にぬける。
- 一、印肉（朱）を少し紙につけて小トゲのささりし上に貼つて置けば自然に吸ひ出す。
- 一、カマキリを捕り乾燥して粉とし飯粒にてねり合せ、トゲささりの上に貼れば吸出すなり。

一、衛矛（ニシキ木、シラミコロシ）の實に甘草を少しまぜてねり、紙に延べて貼れば一、二時間後に少し痛もとれ、トゲは浮き出るなり。又この果實をすりつぶして水油でねり、頭蓋を取るに用ゆ。

一、トゲササリには、甘草をかんでつけて置けば、周圍腐つて遂にとれる。

一、鐵針が淺く立つたのは、磁石で吸ひつけさしてもとれるなり。

禿頭病

一、大根の干葉五株と生姜十匁ほど加へ、煮出して其汁で洗ふ。

一、豆斑猫（別名莞青虫、道敷へ）を捕へ、羽と足を去り、すり潰して飯粒でねつて紙に伸べ、局所へ二三回はれば發毛する。（但し毒物ゆへ口や眼に入れることは禁物）

一、疥癬のため禿頭になつたものは唐菖蒿（フダン草）の葉莖を煮出し其部位を洗ふべし。

一、栗のイガを霜としてつけること。

一、林檎を碎いて絞り、其汁を多くつけること。

一、生鯛の骨を霜にし、ゴマ油にてとき、禿頭病にてヌケタ跡へつけること。

一、毛髮脱落し禿を生じたる時は、唐菖蒿（フダン草）の葉莖を煮出して根氣よく其部を洗へ。

一、五八霜を胡麻油にてねり、病後の禿頭につければ大効あり。

動脈硬化

一、患者を横にねかして、一人が片手を擴げて左右のコメカミの所を押へ、片手で頭の後方の下俗に云ふボンノクボを拇指で強く壓へる。さうして一人は患者の手と足を逆さまに撫でるか、又は芥子水を足のハラに貼ると十中八九は正氣に歸る也。

一、青松葉を常食として効あり。

一、動脈硬化は便秘や排尿量に異常を呈したり、腰足が痛み、肩のこり、頭痛、不眠、めまい水腫、耳鳴り、手足先の時々のシビレを随伴症として起すことあり。

乳の病

- 一、田螺をすりつぶして貼ると、乳の腫れに効あり。
- 一、兒が乳をかみて傷が出来た時には卵の白味の油をつけるとよい。

(白味油は鍋火にていると油になる)

- 一、餅の肉をつぶして乳豆につけてよし。
- 一、アズノ仁をガーゼの上にて打ち碎き、其汁を乳の上につけても効あり。
- 一、水仙の根とキハダとすり交ぜ綿に延ばしてつけて置けば効あり。

(水仙の根は乳病一般に大効あり)

- 一、茄子の蒂を霜にし、飯粒とねり合せ貼して効あり。
- 一、鶏卵の霜を毎日三度茶にてのむこと。
- 一、乳癰には、黒砂糖と鱈をすり潰し、布にのべて貼る。
- 一、乳の出の悪しき人は鯉の味噌汁、米の粉團子、チンヤ(荳蔲)の葉の味噌和へ、蒲公英(シボボ)、タンボコ、タナ、クヂナ、クヅナ、ワウクワ、フジナ)の味噌和へ等大によし。
- 一、乳房にシコリを生じた時は、犬山椒の實を陰干して砕いたものを酢にてねり、紙に伸べて、

シコリの上に貼りてよい。

- 一、乳の少き婦人は、五寸位の鯉の腹をあけ腸を出し、其跡へ餅米の玄米を一ト握り入れ後をぬみ、鹽辛くないやうに、味噌にて一晝夜煮れば、骨もウロコも軟くなるから、それを食するとよい。

- 一、柘榴の實は乳を能く出して子を養ふなり。



(センキウ)

- 一、川芎(センキウ、オンナグサ)の乾したのを熱湯中に入れ(極少量)で煎じ、乳の出ない乳房に度々取かへて、熱いのを當てて、四、五日連用すれば治る。長くても二週間もすれば完全に治すること請合ひ。

- 一、牛膝(キノコヅチ、フシダカ、トビツキ)の全草を煎じ詰め、濃厚なる液を、

布片と浸ませて、婦人の病める乳房につけてよし。

(牛ノコヅテ)

一、ハコベの生の葉、莖、又は乾した

ものを生食又は煎用すると乳量が増える。又生葉を毎朝味噌汁で用ゆるもよい。(鯉を食へば同上なり)

一、水仙の花を摺り潰して塗れば乳病一切に特效あり。

一、ちしやを常に食用すれば乳を出し、眼を明かにするなり。

一、ちしやを常に食用すれば乳を出し、眼を明かにするなり。



血 止 め

一、呑み加減の日本酒を疵にかければ止まる。

一、埃茸(ホコリタケ、鬼フスベ、藪玉、馬勃)の白い粉(飛びさる分)をとりて疵口へつけば止まる。

一、怪我疵をした場所の何草でもよいから三種をとり、能くもみて疵の上につければ血は止まるなり。(但しシヒナ草、乾き草、枯草は駄目なり)

一、溢柿の汁をつけると止まるなり。

一、蒜の葉をもんでつけると切り創は血が止まり治るなり。

一、切り創、毒虫のさした跡、あかざれ、霜焼等には蒜の葉をもんでつけるとよい。青葉がなければ球を剥いでつけるなり。

一、壁錢蜘蛛(ひらたくも)の網を疵につけると血は止まるなり。

一、器物其他に血のついて汚れた時には、生姜を薄く切つに其の血のついた上に載せれば皆取れるなり。

一、毒虫にさされた時は、菊の葉を鹽でもみ、其の汁をつければよい。

毒虫と煙草其他蜂螫

一、山登りなどに毒虫にさされたときは、所持の煙草をすりこむと、應急手當になるなり。

- 一、蜂に螫された時は、チチレ紫蘇の葉を搾り、其汁を患部の上にぬるとよい。
- 一、蜂に螫された時に、アンモニヤ水をつけるると痛を緩和されるなり。

腸チブス

- 一、コウロギ三四疋を取つて、その搾り汁を吞ませる(酒で)とよい。白湯で吞ませる尙ほ可い。
- 一、野蒜(のじんにく)を醬油で煮食する。
- 一、整腸劑(複方ビスミット散)次硝酸蒼鉛二十五グラム、タンナルピン二十五グラム、ケンチアナ末十五グラム。以上混和二十五日分。
- 一、チブス菌は熱に對する抵抗力が弱いから、熱く煮たものを直ぐ食べれば無難なり。

腸の病

- 一、十二指腸の診断は(十二指腸蟲は多くは空腸に寄生して居る、十二指腸に寄生することは稀なり)鳩尾と右方一寸五分の骨の外れと胸椎(脊)十、十一、十二の脊骨側(左方)に在るものとす。

一、慢性腸カタル

○生梅一升に上等焼酎一升と白砂糖五百匁をよく混ぜ、貯へて置き、この汁を盃半分位から始めて一週間連服し、又三日休みて更に一週間飲むと仲々大効あり。

○干振の應用。

○白梅酢の應用。

○蒜の食用。

一、菊葉黃蓮(キクバオウレン)の葉、莖、根を煎用すれば、大腸カタルの特効藥也。

一、腸一帯がどことなく猛烈に痛み、頻繁に吐き氣があつて終に便臭のあるものを吐く事さへあるのは腸捻轉です。特長は腹が張つてもガスが出ず、便通は勿論ないなり。

一、大腸カタルは、盲腸と反對側の左下腹部に痛む中心があります。

一、十二指腸蟲は正に吸血魔だ。僅か三分か五分の小蟲でありながら、鋭い牙で小腸壁を喰ひ廻る。その上にこの蟲が分泌する毒素で人の心と身を苦しめるものである。此「十二指腸藥」は「アンキロ丸」と呼んで(熊本縣菊池郡隈府町袋屋藥局)に販賣せり。

チフテリヤ (支那名 馬痺風)

- 一、チフテリヤの大毒は、午莠の根や葉及種子に附着し居る。勿論、子供の母親も喰ふてはならぬ。嚴禁すべし。
- 一、白屈菜の煎汁は、チフテリヤに効あり。
- 一、耳糞を小麦藁の管にてのどへ吹き込みてよし。
- 一、小兒に多き病なり。チフテリヤ菌が咽喉部を犯すによりて起るものにして、其始めは犬の遠吠するが如きセキを爲し次第に氣道狭小して呼吸困難となり(咽喉部に實扶的里義膜生ずるによる)遂に窒息死に至る。この病には、チフテリヤ血清注射有効なれども遅れては効なし。

中氣、中風、卒中 (癩は中風の總稱なり)

- 一、中風には(眞鴨、眞鳧)の頭を霜にし、一日三回一回一匁づつを服用すれば、半月にして輕快し遂に全治す。また活鷺(イキアヒル、白アヒル最も良い)の生血を口中に灌ぐも大効あり。

- 一、中風は痰の聲なり。中氣は痰の聲なし。
- 一、脊髓癆といふはヨイ／＼のことなり。
- 一、中風には接骨木の春の芽を煮て食ふてよし。又葉莖を煎じて行水してよし。この行水は中氣豫防にもなるなり。
- 一、中風にて口を閉ぢ開かざるには、白い鹽漬梅の肉を齒にすりつけければ開くなり。(齒を損することなし)
- 一、卒倒したるときは左の一を速行し救急せよ、覺醒するものなり。
- 胡椒粉を鼻孔へ吸ひ込ませること。
- スルメと甘草を煎じて吞ませる。
- 梅の木の苔茸を霜にして吞ませる。
- 一、中風には、柑橘類、海藻類や昆布茶を吞み且つ食はせれば大効あり。
- 一、半身不隨は大抵左肩より來るなり。依て水蛭を左肩や頸部につけることも大効あるなり。
- 一、卒中の妙藥 (既發は治し未發は起らず) 次の通り



(クガイサウ)

一、中風にて言語不通、飲食不能の時は、芥子粒五匁を酢一合に投じ五匁に煎じ上げ、頰と顎との下に貼り付ければ口も利けて食物も通ず。

一、中風にて口、眼、歪斜するには、生カラスウリ(王瓜、タマツサ、キツネノマタラ)を搗きて汁を絞り、大麥粉と和し餅となし、炙熱して心頭に當つべし。過多なるべからず。

一、中風にて半身不隨の時は、曼珠沙華(ヒガン花、死人花、舌マガリ。この草花にはリコリンいふ毒あり)の根を取り卸ろして紙に伸べ、不隨の箇所、頸根、眩、股等の關節に貼り、日に一回貼るなり。

○濱防風(ハマバウフウ)の煎用。

○榊(サカキ)の葉の煎用。

○マタタビ(木天蓼)の果實の煎用。

○クガイ草(威靈仙、九階草(葉を九階に出す)フナバラ)の葉莖花の煎用。

○土當歸(ウド、獨活)の根の煎用。

一、蠶蛹を油炒にして食へば中風到大効。

り替へれば奇効あり。(但し口、眼に入れるなかれ)

一、中風にて半身不隨には、澁柿を卸し大根と半々に、五匁乃至一合を一日三回に十日間連用すれば大効あり。

一、棕栢の葉を適宜煎用し、三週間も續ければ治る。又本病の豫防ともなるなり。半身不隨も治るなり。

一、中風にて口面を牽き面喎斜するには、石灰一合日本酢にてねり泥の如くし、喎斜右なれば左へ、左なれば右の各々痛む所と同じ高さの所に塗布すべし。數回繰り返せば治す。

(落す時には水にて洗ふ)

一、クサギの葉(ウコギ、五加)や昆布アラメの類を食用させよ。

一、中風、中氣、卒中に罹りしものは

柿澁 一合 大根卸し 一合 (二日量とす)

右二品を合せ一夜休めて翌朝から、一日三回づつ服め、多汗して大効あり。初發なれば二三日で治る、十日間連用してよし。柿澁は古いほど良し、大根卸し速用は辛いから服めぬ。

一、中風の煎藥

半夏、木香、天南星、各一匁半。蒼朮、細辛、石菖、各一匁。甘草一匁。右七味。水二合にて十五分間煎じ一日三回分用。

一、卒倒、人事不省の時の煎藥

麻黄、人蔘、黄芩、芍藥、川芎、杏仁、防已、防风、各一匁。附子五分。右水適宜煎じ一日三回に分服。

一、中氣、中風、さし込みて急々の場合は、胡椒の粉、又は煙草の粉を鼻孔又は咽喉に吹き込み「クシヤミ」をさして良し。

一、中風、中氣、卒中にて口を嚙ぎて藥を飲まざる時は

○上齒と下齒との間へ、新しきキセル様のものにてコチ開けて其一方よりフキ込む。輕ければ鼻をつまめば口を開く。

○奥齒の奥の空地に拇指か人指し指を入れ、ば大低は口を開くそこより藥を入れるなり。又兩手で手加減して頤を下へ押下ぐれば開く。但し膝にて頭の動かぬやう保持して押下ぐべし。

一、中風、中氣、卒中の素人鑑定方法

○中風の人、拳を堅く握りつめるは不治の症なり、それを仰向きにころばして見るに、また元の如く握るなり。

○卒中鼾聲あるは必死なり。

○中風を患ふ人は、二三年前より章門から腰にかけて力なきものなり。之を摩して見て力なきは必ず患ふなり。左脇下なれば左半身不隨、右脇下なれば治し易きものなり。

一、中風の徴候

腰のつがい骨と肋骨の間に手を入れて見ればグザと入る、之は大肉の離れたるなり、必ず手足麻痺する也。中風にて卒倒したるは人事不省なり、何れも大肉の離れたる方は不隨を起すなり。兩方の大肉離れば死ぬなり。

一、中風、中氣、卒中にして忽ち紫黑色を吐出すは死なり。諸病皆然りとす。

一、白濁露は中風、動脈硬化、消渴に大効あり。

一、高血壓の關係は四十一頁に在り就て見るべし。

一、中風の特徴は、卒かに氣を失ひ齒を食ひ、しばらく目をにらみ付け、其身冷て咽喉の方に痰の聲なし。即ち中氣の起る前に心氣を勞し、又は大に怒ることあり、又は思案することありて、氣を鬱する時に發する病なり。元は皆七情の過極するより起るなり。

〔療法〕 先づ鼻に胡椒末又は烟草の粉を吹き込みクシヤミをさせ、後に酢を炭火の上に滴らし入れて酢の氣を病人にかさせ、鹽白、湧泉に（第三章お灸療法参照）灸すべし。又姜の搾り汁を湯にて攪き拌ぜ飲ましてよし、又木香一匁を煎用してよし。

〔特徴〕 中風は身温にして脈浮く、中氣は身冷へ脈も沈む。

一、中風の起る時は、卒かに倒れて人知らず齒を食ひしばらく、拳を握り、痰湧くが如く喘息し、眼口ゆがみ、半身必ず眼を見つめて、或は上眼をつかうものは中風の特徴なり。

中風にて卒倒し、口を開き、手を開くが如くまた握り、眼を見つめ、或は上眼をつかうものは中風の特徴なり。

〔療法〕 煖室に入れ噴嚏させるべし、その方法は、皂莢（サイカチ）細辛等分に粉にし、又は天南星や半夏末を粉にして吹き入れてもよし（鼻孔へ）また此等の藥草なき時は胡椒の粉を吹

き込む、急の時は烟草の粉を吹き入れてもよし。即ち吹き入れれば頭髮を握つて引き起すべし、其時クシヤミ出るはよき兆候也。この吹き込は筆の軸へ藥をのせ浅く吹き込むべし。

又コヨリにて鼻穴をツツキ、こそぐつてもよし。

次に手の拇指の爪にて病人の人中をしかと押へ付け、又急に病人の兩手兩足の尖端（指の先）までまで卸すべし、これ痰氣を下げるなり。又炭火の中へ酢を一二滴程傾け入れ酢の氣を病人の鼻中へ入れるやう嗅がすべし、稍暫くして醒めるものなり。

痰塞り不省の時は、葱の白味を細刻して三合、小麦麩三合（麥ヌカにてもよし）鹽二合よく和ぜ三包に分け炒熱し、布片に包み、病人の臍上を煖むべし。

以上は、中氣、中風、共通方法なり。

一、支那の書物には、中風とは風氣に傷けられたるをいふ「傷寒中風」といひ風邪の一症なりといへり。

一、同上、中氣とは身内部交流の氣調和せず、卒然倒るる腦溢血のやうなもの也。俗間「卒中風」又は單に中風など稱するもの之れなり。

一、中氣に口をつむぎ恍惚として手足シビレ、或は腹痛み、又は息絶へ又は息出づるには伏龍肝一匁を粉にして茶碗一パイに煎用するとよい。

一、桑煎茶で中風を直した實例、白家鴨の生血で中風を治した實例は澤山あれども省く。

動脈硬化治療ノ目的ハ左ノ五種ニ着眼シナクテハナラヌ

第一 腎臟ノ機能ヲ旺盛ニシテ血中ノ有毒物ヲ體外ニ排除スル事。

第二 血中ノ有毒物ヲ中和シテ毒作用ヲ成ルベク少クスル事。

第三 身體内ノ各細胞ノ新陳代謝心用ヲ増進スル事。

第四 食物中ノ有毒物を腸壁ヨリ吸收セシメザルコト。

第五 血液循環ヲ整調スル事。

中毒

◎ 魚中毒其他

一、河豚の中毒には鶏冠の血を吞めば大効。

一、豚肉の中毒には柿、柿の中毒には豚肉を食せば治る。

一、猪肉とソバを同食すれば毛髪ぬけ果てるなり。

一、酒毒には生鶏卵を吞むべし。

一、鮪、鯉、鯖の中毒には、ツバキ(椿の葉)を煎じ出して飲むとよい。

一、鮪の中毒には櫻花の鹽漬を食べるか、桃の實二三個を食べるか、生卵を一つ飲むとよい。

一、鮪の中毒には、布海苔を煎じて飲むと解毒する。

一、鮪の中毒には、胡麻油を盃に一パイ飲むとよい。

一、一切の魚中毒には香茸(指ほど)を霜にして粉末にし吞むと、吐き下して治る奇藥なり。實によく効く。

一、魚の中毒には黒砂糖を水に溶いて飲むとよい。

一、瓦斯中毒には酢を皿に入れ、それへ炭火を入れると蒸汽となる、之をかがせるとよい。

一、フグの中毒には、

○酢を三、五ハイ吞ませるとよい。

○黄金又は金箔數十枚を煎用する。

○スルメイカを焼き又は煎じて吞ませよ。イカの墨をのませよ。

一、茸の中毒。

○茄子の蒂を煎じて飲ませよ、櫻の皮を煎じて飲ませよ。

○生葱のヌルヌルした汁をナメさせてよい。

○毒茸と考ふるときは牛に與へて見よ、必ず喰はぬものなり。

一、水當りには生姜の搾り汁を吞ませよ。

一、フグの善悪を知るには焼いて見よ。焼難きは有害なり。

一、アルコール中毒(酒毒)には、

○柿を多食すべし。卸し大根を多用せよ。大豆を煮たらして出た汁を吞む。二日酔には梅干四個を食べよ。伏龍肝もよし。

一、鯖の中毒には、串柿を食べると直ぐ治る。

一、鯖の中毒には、黒砂糖を食べるとよい。

一、春先の馬鈴薯の芽は、ソラニンといふ毒素を持つて居るから必ず之を取捨てよ。食用してはならぬ。

一、一切の魚中毒には鳳仙花(白花のものが第一等也)の果實を一回に付十粒位、のむとよいなり。頗る奇効あり。

一、藥物が中毒するには左の五系統がある。

(1) 酸性の中毒。例へば硫酸、硝酸、鹽酸のやうな強酸を飲んだと判つた場合は、重曹か、それなれば灰汁、或は普通石ケン水を水に溶して飲ませます。また前述の鶏卵、牛乳の他に葛湯や寒天を與へ、瀉腸もやる。

(2) 鹽基類の毒藥。例へばアンモニヤ、苛性加里、苛性曹達を服用したと判つたら、食酢、果物の汁を多量に與へます。

(3) 綠青の中毒。これは古くなつた綠青のついた銅鍋で煮たものを知らずして食べた場合に起る中毒です。この時は卵の白味又は牛乳を多量に與へる。また煨製マグネシヤ四瓦、卵の白味の水二〇瓦と水八〇瓦とを混じた物を、五六分置に食匙二杯づつ與へます。

(4) 昂朮中毒。牛乳と卵の白味だけを多量に與へます。時機を失すれば十中八九は死す、要急。

(5) 睡眠剤の中毒。自殺の目的でペロナル、ヂアル、ルミナル等の睡眠剤を多量にのんで苦しむ時には、速かに吐かせ頭を冷やし、顔に冷たい水をふきかけてやります。意識を回復したら濃い茶を冷やして與へます。

一、猫イラズにはオキシフル。但し人事不省の場合の外に、先づ過マンガン酸加重で胃を洗滌することが必要なり。

一、魚毒には香茸の霜を適宜飲ませると宜いなり。

一、一般の毒消には、ホウセン花の種子を用ひます。(白花のもの最良也)

一、漆カブレは、如何に大きくても蟹のゆで汁で洗へば治る。

一、諸中毒にて永年不治の場合の時は、山櫻の樹皮を焼きて炭を搗鉢にてよくすり絹篩にてこし酒盃一パイほどを梅干の肉(核を去る)と共にすりて三丸とし、毎日一回(或は朝夕二回)に吞めば、如何なる難症も直に救はれるなり、即ち下るものなり。

一、水銀の毒を受けたる時は、黑豆を多く用ひよ。

一、葱の中毒には薬の灰汁を少し吞めば直ちに治る。故に葱畑へは糞から或は薬類を入れてはならぬ。注意のこと。

一、昇汞を誤用したときは、卵白を吞ませればよい。之は即ち卵の白味の主成分たるアルブミンと昇汞は溶解し難い化合物を作るからである。

◎ 毒草中毒の特異な症状

一、昏睡状態。けし、とりかぶと、ばいけいさう、いぬさふらん、たばこ、どくにんじん、きんぐさり。

一、痙攣強直。番木甙、どくぜり、とりかぶと、どくにんじん。

一、瞳孔散大。朝鮮朝顔、はしりところ、とりかぶと、どくにんじん。

一、瞳孔縮小。やばらんち、たばこ、けし、赤はいとりたけ其他ムスカリンを有する諸種毒菌

一、流涎。やばらんち、たばこ、きんぐさり、むげなでしこ、其他サホドキシシ又はムスカリンを有する植物。

一、肺水腫。けし、ちきたりす、やばらんち、たばこ。

一、脈搏遅徐。 (やぼらんぢ、たばこには後に速脈且つ不整脈となることあり)
けし、ぢきたりす、やぼらんぢ、たばこ。

(やぼらんぢ、たばこは後に速脈且つ不整脈となることあり)

一、脈搏急速。 朝鮮朝顔、はしりとこ。

一、下痢。 きつねのぼたん、きんぼうけ、たがらし、はづ、にせあかしや。

一、麻痺。 どくにんじん、いぬきふらん。(下方より上行することあり)

一、尿に血色素を有するもの。 むぎなでしこ、たうごま、はづ、にせあかしや。

一、流産の虞れ。 いちめ、にほひひば、麥角。

◎ 毒 け し

一、カニの中毒には連根の生汁(卸金で卸して)を茶碗に一二杯又は冬瓜か紫蘇の葉を煎じて飲むとよい。

一、イカ及貝類の中毒にはゴマ油を杯一パイのむとよい。

一、河豚の中毒は、水四合にスルメ一枚を入れ二合にまで煎じつめ、スルメ共に食用せしむ。

- 一、天ぶらの中毒には、九年母の皮一匁を水一合に入れ五勺に煎じて飲む。
- 一、魚肉の中毒は櫻の皮を煮用す。
- 一、青梅は、ハウキ草を煎じてのむ。
- 一、茸の中毒には大豆の煮出し汁か、茄子の蒂を煎出してのむこと。

痔 疾 (痒痔、裂痔、脱肛、痔瘻、疣痔)

- 一、川蟬(魚狗)の霜を胡麻油にてねり、患部に塗布す。
- 一、すつぼんの頭を霜にして胡麻油にてねり○粒位にし、肛門(患部)へ押し込み置けば、その日より痛み止む。殊に女子の肛門病にて牡丹の花の如きにも奇効あり。
- 一、煙草の莖の煎汁を鹽に入れ尻に敷き煖めれば、一生中痔病起らず。
- 一、川蜆の煎汁で度々洗ふこと。
- 一、蝸牛の霜へ黒砂糖少々入れて交ぜ胡麻油でねり、毎日、病患肛門へぬること。
- 一、山椒魚の霜は、何痔にも大妙薬なり。

- 一、疣痔は、モグラモチを霜にしてゴマの油にて溶きつけてよし。
- 一、鱈を小皿に入れ、白砂糖をかければヌル／＼にとける。其汁を綿につけ患部へあてる。
- 一、石龜の肉の食用は脱肛に効あり。
- 一、白馬の糞は痔病に大妙藥なり。其方法は搾つた汁を綿につけてあてるか、或は糞全部を煮詰めて綿又はガーゼにつけてあてればよい。
- 一、鶏糞の白い所丈を取り、極上の煎茶を濃く煮出し、交せて其液をガーゼにつけ患部に當りてよし。
- 一、あらめの煎汁をつけてよし。
- 一、水蛭（綿蛭でない）へ黒砂糖をかければ遂にとけて了ふ。其汁を綿につけて肛門にあてると効あり。
- 一、犬のダニ（犬壁虱）をすりつぶして、塗布すると効多し。
- 一、脱肛痔には蛤の肉一合ばかりを布に包み温めて患部に當てよ。
- 一、小兒の冷え痔は、蜂巢を煎じた汁をカーゼに濕して局部を温めてやれば、二三回で治る。

一、脱肛には、田螺の霜をゴマ油に交せて塗るとよい。

一、一般痔が年を経て治せざるには、蝸牛四五十匹を胡麻油にて煮、膏藥として用ゆべし。大効あり。

- 一、臘臍の肉は痔疾に大効なり。
- 一、モグラモチを霜にして胡麻油を以て練り綿にのべて肛門に貼す。
- 一、熊膽を水に溶きつけてよし。
- 一、キハダの皮を煎じた汁で度々洗ふてよし。
- 一、鶏のトサカの煎汁にて、脱肛や痔瘻を洗ふてよし。
- 一、蒜を一分位に切り焼石にのせて油を出させ、其油を疣痔の上にあてると良いなり。
- 一、ナメクジを生を儘オブライトに包み嚙下すると如何なる難痔も必ず根治するなり。
- 一、凡て痔の痛むには鶏冠の生血をつけてよし、又痔瘻や裂痔には卵（鶏）の油をつけてよし。
- 一、蚯蚓の土を出し霜にして胡麻油とねり、綿につけ患部へはりてよし。
- 一、綿蛇の霜を胡麻油にてねり、膏藥の如くして一切の痔疾患部へつけてよし。

- 一、破裂せざる疣痔等には、茄子の蒂又は根を煎じ出して洗へ。
- 一、蛇莓の實を取り瓶に入れ置くと茶褐色の汁が出る、其汁を綿につけ患部へぬりてよい。
- 一、ナメクジに白砂糖をかけて置くと知らぬ間にとけるこれを綿につけて患部へ當てるとよい、
- 一、ドクダミの生根一匁をすり卸し、一日三回少しづつ分服する。又乾葉莖二十匁を五合の水で四合に煎じ、一日三回各一合づつを飲むとよい。
- 二、痔瘻の痛むには、山椒の實を粉にして服用す。凡そ一回三粒位にてよい。
- 一、カマキリを狐色に焙り胡麻油中に入れ之を脱脂綿につけて肛門に當てると痔疾に大効あり。
- 一、柳の皮や枝葉を煎じて洗へ。
- 二、脱肛には、赤ミミズを白砂糖にて溶き其汁を綿につけ患部に當る。又酢漿草（カガミ草、酢いも草、酢草）の葉莖と根をとり搗き碎き、布に伸べ貼れば効あり。
- 一、露の根を遠火で焙り、柔みて軟くなつたら痔瘻につけるとよい、ソバ殻を煮出した腰湯もよい。
- 一、痔瘻には鶏卵の油をつけるもよい也。

- 一、痔疾には、ギシ々々（羊蹄、シブクサ、シノベ、ノダイワウ）の根を煮出して洗ふもよい。
- 一、脱肛には、餅の頭を黒焼にしてつけてよし。
- 一、牡丹花の如く出る痔には、田螺の大一個を漆器の中へ入れ、其蓋の中へ龍腦油五匁を入れ置けば水が滴る也。其水を鳥毛にて痔へぬると大奇効あり。
- 一、無花果の葉二枚とヨモギの葉一枚を煎じて洗ふてよし。
- 一、蝮の霜を胡麻油にてねり患部に貼つてよし。
- 一、茄子の霜と胡麻油とをねりつけてよし。
- 一、ナメクジを胡麻油に入れて置けばとける、（一合に五六疋）綿につけて貼るとよい。
- 一、鯉の鱗を三枚重ね、薄い布片か脱脂綿に包み、肛門に當てて居るとよい。
- 一、沈痔や裂け痔等には、痛む所の周圍に蛭をつけて毒血を吸ひ出させて全治した人がある。
- 一、オキナグサ（白頭翁、シヤグマサイコ）の根をすり卸して、痔の痛むところにつけてよし。
- 一、ポリプ痔といふのは、肛門内直腸面から球状の瘤が長い紐でブラ下りて來るものなり。
- 一、脱肛痔と椿の葉、枇杷の葉、及アヲキの葉をアブリての治療は効多し。

- 一、小兒脱肛は、氷を小さく圓錐形にして、それで脱肛を押してやれば四五回すると必ず治る。
- 一、一七五頁に脱肛帯のことあり、必要あらば見るべし。
- 一、痔疾に蛭をつけることは大妙法なり。但し一度に七八疋づつ數回吸はせるとよい也。
- 一、吸はせるにはコップに水を少し入れ、蛭を入れて肛門へつけければ吸ひ着くこと妙。
- 一、痔疾の灸は、兩手の拇指を屈して第一節の上の凹き所に、七日ほど日灸五疋づつすえるとよい、大効あり。

乳 脚 氣 (血脚氣)

- 一、産後に乳兒の爲めに營養分を搾取され(産前には胎兒の爲めに)たり、授乳のために營養の不足を來たすから乳脚氣にかゝるなり。
- 〔療法〕 無砂搗糠を撰び、熱湯を加へつつ一錢銅貨(鳩卵)位の糠團子を作り、毎食後一時間に三個づつ食べるがよし。少し雜食なれども忍耐せよ。
- 〔同〕 糠茶即ち無砂糠二合を炒り狐色となし、糠袋に入れ水六合を加へ、文火で十四五分間沸騰させて煎じ、番茶の代りに用ゆべし。

淋 病

- 一、大麥三合、甘草二匁を煎じ、茶代りに呑む。
- 一、耐の霜を三本指でツمامほど、白湯にて一日三回三日間呑む。
- 一、田螺の霜は淋病藥の最上也。一回に三本指でツمامほど用ひてよし。
- 一、鯉の霜は一回に三本指でツمامほど用ひてよし。
- 一、夏枯草(ウツボグサ)の花は淋病の妙藥、甘草を合せ煎用すべし。(一日量七一十五)
- この草の葉は、頭痛を治し、癭瘤脚腫をも治す。
- 一、淋病にて出血甚しき時は、柿の蒂を霜にし、食前に飯のとり湯にて呑む。
- 一、イタチの頭を霜にして用ひて淋病に効あり。
- 一、アケビの葉、莖、實等を霜にして、三本指でツمام位を一回に用ひてよし。
- 一、燕の嘴と足とを霜にして用ひてよし、分量は極少しなり。

- 一、カマキリの霜を一回に二本指でツマムほど數回用ひてよし。
- 一、蠶蛹の佃煮も効あり。
- 一、攝護腺の腫れて疼痛の激しき所に、蛭五、六疋宛を一日四五回宛吸ひ付かせること、其の疵跡へ水銀軟膏を貼るとよい。
- 一、淋病奇藥 鶏卵の尖つた方に小刀にて小穴をあけ、其穴へ蚯蚓を生ながら入れ、綿を以て能く蓋を爲し七ツ調へ、湯を沸かして煮ぬきて、其カラ(卵)を去り、細末となし日陰に干し、卵一つ分を早朝に空腹に服し、一切鹽類、茶、酒、油、房事を絶ち七日に用ゆ。濃淋治せずといふことなし。

綠茶の化學的成分

- 一、綠茶の主成分即ちタンニンは人體になくはならぬビタミンC、カロチンはビタミンA カフェインは興奮劑といふやうに有効無比のものなり。

旅行足疲れ、遠路行

- 一、疲れれ足は、全身に一ト握りの鹽を、腰の下特に腓腸などへ強くすり込みて五分間ほど横になつて居れば忘れたやうに治る。
- 一、旅行中、足豆など起らば、半夏の粉をソク飯にて足の裏へ貼る。
- 一、遠路して足のつかれざるには、大黃、細辛、烏頭の細末を等分に合せ、鹿の油にてねり、足の裏に塗れば疲勞することなし。
- 一、梅の花を、靴なり水足袋の間に入れて置けば、底豆の出来ることなし。

癩 癩

- 一、夏枯草の葉、莖を煎汁としつけてよし。
- 一、田螺の霜を白紋油にてねりつけてよし。
- 一、何首烏(ツルドクダミ)の根部を煎用して効あり。

- 一、サルオカゼ(松蘿ともいふ、木に寄生す)を煎用して大効あり。
 - 一、タンキリ豆(鹿藿、キツネマメ、キンチャクマメ)の種子を煎用して効あり。
 - 一、田螺十個分と梅干二個とをすり、ソバ粉茶ワンパイを入れ、酢を加へて貼用のこと。
 - 一、カラス瓜(王瓜)の根を煎用して大効あり。
 - 一、すつぽんを味噌汁にて食用すべし。又用螺を殼共に霜にして白絞油にてとき付けてよし。
 - 一、黄蘗の粉をウドン粉にてねりつけてよし。
 - 一、水仙と鷄糞と酢とを程よくねり合せてドロ〜にし、日本紙にのべて腫れ痛む所にはり、朝夕二回はり換へてよし。
 - 一、雀の肉骨をた〜いて粉にして貼り、又は食用してよし。
 - 一、淋巴腫れから來たルイレキには家雀の霜を三本指でツマムほど飲むがよい。
- (一切のルイレキにも効多し)

黄 疸

- 一、鶏卵の霜を少量の酢にかき交ぜ吞むとよい。
 - 一、川蜆一升を水一升で煮詰め、醬油を少し入れ味をつけ、一日三回位に分けて吞むとよい。
- (蜆の身や一般肉類は嚴禁)
- 一、數の子を霜とし、熱の出る二三時間前に粉のまゝ二、三日連用のこと。
 - 一、連錢草(カキドホシ)を陰干にして煎用。
 - 一、黄疸で身體が痒いのは、蜆の殼を細かく碎き、四五勺ほど木綿の袋に入れたのを浴槽に入れてわかし其湯に入るべし。即ち血行も淋巴もよくなる。
 - 一、目高(川の小魚)を三尾、生の儘吞むと大効あり。
 - 一、黄疸で體の痒いときは、蜆の汁を吞めよ。
 - 一、同上、ヨモギの汁も同効あり。
 - 一、アルコールで體を拭くと痒いのが治る。
 - 一、田螺を茹でた汁をのむとよい。

◎黄疸の原因に二種あり。

肝性黄疸) 一、膽道内に膽石や、蛔虫等の寄生虫が引かかり又は入り込んだとき。

一、癌種か肉腫が出来た時。

一、暴飲暴食して胃腸を害した時。

一、膽汁が腸に滲入して行く道が狭くなつた時。

其他——梅毒——チブス——天然痘などの急性傳染病。六〇六號やクロロホルム等の中毒か

ら来る黄疸。

○第二其他の場合は、遺傳性溶血性黄疸ともいふが若い人は少ない。又ヒドイ貧血と同時に皮膚が黄色となる。

○皮膚が黄染しても心配せなくてよい場合がある。即ち蜜柑を食ひ過ぎても皮膚は黄染する。

○右の膽道に膽石のある場合は、右の乳の下か非常に痛み、寒氣に次いで高熱を發し、黄疸となる。

○黄色と變する時は、皮膚に痒味を感じ、乳、尿、汗などの分泌が黄色になり居るなり。特に暗赤褐色となる。病氣が進めば尿が幾分黒すんで来る。

○膽石の場合は、石が腸の方へ排出されずに居る場合大便は灰白色の粘土様になることあり。

○暴飲暴食とか、又は感冒後に来るものは、黄疸の他のものと同じであるが、大便は餘り灰白色とはならない。

○此の病は、農家、魚商、辨當仕出屋、其他水商賣の人に多いやうである。

○黄疸にかゝれば、牛乳、バター、獸肉(赤)等の脂肪分を食用せぬ方がよい。

一、膽石病は、水落ち又は其右あたりに急に激しい痛が来て身體がガタ／＼慄へたり、痛と共に熱が出て翌日位から身體や眼が黄色になる病氣なり。之は膽汁がそゞ道又は水を一時貯溜して置く裏即ち膽囊の中に出來た石の爲めに起るものなり。

一、茵陳蒿(カハラヨモギ)(フナバ、シロヨモギ、ヒキヨモギ、ネヅミヨモギ、アマヨモギ、コギともいふ) は其全草を煎用すれば黄疸に特效あり。

一、濕布に燒酎及日本酒を使ふとよいが、一面には酒にむせることあり。又鹽を焙烙でいつて布袋に入れ、患部にあてるも良い。

一、黄疸には牛乳、バター、チーズ、獸肉(赤)等の脂肪分に富むものは避けるがよい。

一、地榆（ワレモカウ）の根一合を刻み、キツネノタスキ（ヒカケノカヅラ）の刻み各一合とモチ米（支）二合酒二合（モチ米と酒を炒り酒を米に吸はせる）と外にせん屑（鉄屑少量）とを混和せるもの或は丸藥せるものを七分し、更に其七分の一を三分して一日分として黄疽病の適藥とし特效あり。

温あん法及冷罨法

一、コンニャク四五枚をよく温め、水分を去つてタオル又は手拭に包み、局部に當ればよい。冷めたら亦くり返す。即ち毛細管を刺戟し、神経と血管と淋巴腺の調節をよくするから新陳代謝が好轉する。故に神経痛、レウマチス、關節炎に効あり。

コンニャク罨法は古法の最も優なるものなり。

一、硝酸アンモニアを粒のまゝ鉢に入れ、其倍の洗濯曹達を加へて水に溶かせば、非常に冷めたいものとなる也。（氷代用水となる）

ワキガ（腋臭）

一、枳根（テンボナシ、テンボコナシ、テンボノナシ）の莖又は皮の搾り汁をぬれば、ワキガ又は痔の特効藥となるなり。

一、腋臭（ワキガ）は、皮脂腺若くは汗腺より悪臭ある揮發性物質を分泌する。

外用藥 一パーセントフォルマリ酒精

一パーセントレゾルチン酒精

を患部へ塗布する。

最上療法は皮膚を切除して縫合すること。（黄菌毛といふのとよく似て居る）

一、櫛の枝の皮をとり陰干にして番茶よりも濃く煎じ出し、其汁で毎日罨法すると効果がある。

一、梅干の實肉だけを取り、細刻して鍋でカラ／＼に炒り、それを摺り鉢ですり潰し、薄墨にすりて水と混合してクリーム状に作り、之を朝夕二回ワキガにすり込むとよい（よくすり込まないと衣類を汚すなり）

癌の種類

一、胃癌、食道癌、幽門癌、噴門癌、直腸癌、子宮癌、乳癌、皮膚癌、唇癌、舌癌、膀胱癌、肝臓癌。

癌の種類。髄腺癌、上皮癌、硬性癌、膠腺癌、扁平上皮癌など種々ありと熊本市春竹町地盤山院はいふ

關節炎

一、關節炎にて全身痛にはトリカブト(烏頭、カブトギク、カブトバナ、ヤマカブト、ヤマトリカブト)の根をすりつぶし、酒とませ、痛むところに貼れば効あり。

一、關節炎にて肘の痛むときには、罌粟の實(菓子用)をすりつぶし水にてねり、痛む所へ貼れば治ること妙なり。

一、同上の時は、芥子泥を作り患所へ貼れば奇効あり。

一、關節炎と、山菊の葉とウドン粉及酢のねり藥有効なり。

癰

(マラリヤ) (カクランの一種)

一、紫陽花(アヂサイ、八仙花)の花や葉は、オコリに特効あり。一回量五―八瓦なり。

一、ニンニクを卸して湯と和し、發作一時間前に熱いのを足の裏や手の間につければよい。

一、野蒜(野ひるとも云ふ)の根をすり潰し、鍋炭と飯を混じて煉り、之を一日に二三回つつ足の裏に貼れば、必ず治る。

カリエス (腐骨症)

一、里芋と鹽と古姜とウドン粉のねり藥(芋藥)を毎日患所周圍に貼るべし。

カクラン (霍亂)

一、カクランとは急性腸胃カタルのことなり。

脚氣 (乳兒脚氣、乳脚氣)

一、田螺を常食すると脚氣に効あり。但し霜にしてもよし。併し田螺には肺ヂストマ菌が居るから能く煮て汁と共に用ゆべし。

一、脚氣胸先へつかへ死なんとするやうな時には、黑豆五勺を水三合に入れ二合に煎じて用ゆ。

一、大黃八分とビンロージ(檳榔子)一匁の二品を、二合の水に入れ一合に煮つめ、一日四回に分用す。

一、林檎を黒燒粉にして三ツ指だけを一日五回用ゆ。

一、脚氣にて歩行困難の時は、トリカブト(烏頭、カブトギク、カブトバナ、ヤマカブト、ヤマトリカブト)の根をすり卸し、酒にてよくねり交ぜ、痛む所に貼る。

一、脚氣で脚瘻となつた時は、午莠をよく茹で其汁を食用せよ。(齒のよくない人は之を叩き碎き其汁をつける)

一、脚氣衝心には下劑をかけてよいやうだ、下した爲めに助かつた人も多い。

一、脚氣の飲み藥は「げんのしょうこ」と商陸が一番なり。

一、カマキリを霜にしてねり、足蹠へはり、一日二度取り替へること。

一、無砂搗糠三合を布袋に入れ、三合の水にて文火にかけ一時間煎じ、袋を引上げよくシタメて一日量とし三回に分服する。(シタメル時に袋を破るな)

一、とび魚(文鰻魚)を常食とすれば脚を強める。

一、産前産後の脚氣は左の點に注意せよ。

○牡丹根の皮(生なれば三匁乾なれば一匁)水三合と共に煎じ、一日量とし三回に分服。

○産後の強壯劑にはメハジキ(益母草、ヤクモサウ)の葉、莖を煎用のこと。

○産前産後の脚氣には、野薊の花、鬼薊の根を煎用するとよい。

○胞衣下らざるには、モグラモチの霜を糊に押しませ丸くして、臍下一寸の處に貼れば、後産下ること妙なり。

一、脚氣の漢藥

茯苓二匁、白茅根二匁、葛根二匁、茶種の実五匁、小豆一合。

右五品を一日量として煎用する。

一、鱈を霜にして押糊にてねり、脚氣の足裏に貼す。

- 一、脚氣にてムクミ甚しきときは饒粉(鐵クズ)七匁を水七合にて一合に煎じ、一日三回に分用。
- 一、脚氣にて水腫れの時は、就寝時に芭蕉の葉にて足を捲きて寝よ、妙に水氣が取れる。
(朴の木の藥代用も可)

一、脚氣には牛乳を用ひよ、ホンダワラ(海藻)を煮て食せよ、田螺の肉を多用せよ。

◎ 脚氣衝心の兆候

- 一、脚氣にて平臥する能はざるは衝心の兆なり。
- 一、脚氣にて肩息するは衝心の兆なり。
- 一、言語に息の不足と溜息するは皆衝心なり。
- 一、氣急するの脚氣病人、呼吸につれて小鼻の動く病人は久しからずして死す、久病ならずとも安らかならず。
- 一、難症年を経る者、一旦忽然として手足動き、目睛爽なるものは即ち急變の兆也。
- 一、山午莠の根を乾し、一日一匁を水三合にて二合に煎じ、一日數回にのむとよい。
- 一、酢で溶いた鶏卵一個を一日量として吞むとよい。

- 一、杉の葉や皮を煎じて脚を洗へば脚氣に大効あり。努めて多く洗へ。
- 一、午莠は脚氣、脚なえ、脚弱く力なきに良し、用ゆべし。

乳兒脚氣

一、第一に

- 小兒の色つやが悪くなつて血液の色が悪くなる爲め小兒の色がドス黒くなつて來ます。
 - 元氣が悪くて原因と見るべきものはなく泣く。
 - おとなしく寝ないことがあります。其内に嘔吐が起つて來て心臟の搏方が多くなつて來る。
- 以上は其脚氣の毒が心臟を侵す怖い病氣であつて、心臟麻痺(脚氣衝心)の爲めに急死することであるから早く適當な治療を受けることが必要也。
- 即ち聲が嘎れて來たり、泣聲が出なくなつて來たり、それからヒイ／＼呻吟するやうになつたのは、モ一立派な脚氣の徴候であるといつてよい。
- 一、白花げんのしようこ五匁、はぶ草の種を七匁を七合の水で、五合に煎じつめて、其汁で一合

の大豆を長時間煮つめたものを一日中かゝつて食べるとよい。

一、胡瓜の蔓を適宜且つ蒜と黒大豆等を目分量に煎じて茶代りに飲み、且つ大豆は喰ふと大に効あり。

一、脚氣の灸は、左右手の拇指を屈めて第一節の上を目灸五狀づつすえるとよい。

肩の凝り

一、土用中に犬山椒の葉を取り乾細し酢にてねりてつける。

一、蛭に黒砂糖をかけてその溶汁をつける。又肩に蛭をつけて血を取るのもよい。

一、天南星(山こんにやく、ナンナンシヤウ、ヘビコンニヤク)の根をすり卸し、布につけて貼ると大効あり。

一、波也宇知加太(ハヤウチカタ)は、急に應じて刃物又は陶器の破片にて肩の邊りを切り血を出してよし。又は針にて下唇の内邊齒の方を數箇所刺して血の一合も出せばよし。

一、肩の凝りと云ふことには同時に便秘する、頭の工合が悪い、烈しき労働、細工仕事、過度の

心配事が不可なり。食物はごま味噌、魚のみそ汁、醬油番茶がよい、併し多量は毒なり。

一、肩の凝りには芋薬をつけて効あることあり、足や腰に生薑と酒の外用をして治ることあり。

一、毒梅から來る肩の凝りは、左肩の前方から後方(脊の方)へ向けて鈍痛を覺へ、遂に左手を眞ふなり。

一、膽石病から來る肩のこりは、右の肩がこり、脊中まで痛んでくる。

一、芋薬は皮をむいた里芋を卸し、十分の一の生薑の卸汁を加へ、里芋と同量の小麦粉を混ぜて貼る。(之を制ぐには卸し生薑の汁二十匁を一升の熱湯でふり出した汁でソロ／＼とムケは取れる也)

一、カブレには、杉の葉で擦ると全治す。

一、尖の方から卸した汁を絞取つた大根卸しかすを茶碗一パイ作り、又別鍋にダラにすけ(十錢銀貨大)ほどを溶かし、其中へ右の大根卸しを入れ手早くかきませ、二寸角位にのべて肩のこりに貼る、非常に痛むけれども二度ほどで治ること妙なり。

一、蒜をすり卸し、少量のウドン粉とねりて布にのばし、肩のこる處へはりても効あり。

一、肩の凝りには、蛭を五六十疋ほど一時につければ(頸動脈の部分)治るなり。蛭を入れたコッ

ブを逆さに伏せて肩へ當てる也。肩のこつた時には、血の中に細かい砂のやうなものが見えま
す、それが血管を塞いで居るなり。

肝 臟 病

一、トマトを絶へず用ゆれば肝臟病に効あり。

感 胃 (カゼ)

- 一、風をひいた時は、首筋、脊骨、肩等をコンニヤクにて温罨法すること。
 - 一、せきの出る時は、胸をコンニヤクで温めること。
 - 一、葱(生なれば尙ほ可也)を生食すれば解熱する。
 - 一、神経痛、レウマチス、關節炎もコンニヤクで温めてよし。
 - 一、以上の四種療法は、近時流行のアンチフロヂスチンによる罨法と同じである。
- 温罨法は毛細管を刺戟し、神経と血管と淋巴腺の調節をよくするから新陳代謝が好轉する。

- 一、感冒は空腹の時に感じ易いから努めて空腹(下痢をかけた後などの)を避けたがよい。
- 一、雪の下の葉を四、五枚位、水三合にて二合に煎じ、一日三回に分服するもよし。
- 今時の流感は肺炎や心臓麻痺になり易い。
- 一、鼻風が、鼻の方へ進むと蓄膿であり、耳へ進むと中耳炎、咽喉へ進むとチフテリアや猩紅熱
や百日せき、麻疹、嗜眠性脳炎などになり易い。
- 一、胃腸のカタルや心臓の病氣、腎臓の病氣も感冒から誘發され易い。
- 一、感冒流行時には居所の温度に適するやう着物の調節が必要である。室内で厚着したり、家着
のまま外出したりしてはいかぬ。
- 一、寒冷は人を疾病準備状態にすること多し。
- 一、疾病準備状態に對しては、外部のバイ菌の感染も受け易くなるなり。
- 一、芍藥の花を陰干して、感冒の際三四ヶ瓣を生薑と共にすり潰して白湯にてのめば効多し。
- 一、感冒には大根を豎に二つに割り間へ唐辛(成るべく辛くない分)を挟ましておろし、多く使用する
ること、汗が多く出て一夜で治る。

家畜家禽の病

- 一、鶏に羽シラメ、足に皮膚病の時は、豚の油を足ならば直接に、羽シラメはトサカの外へつけければ全身にまはる。
- 一、同病に水銀軟膏を用ひれば、ウロコを剝離してヌツペラボウとなる也。
- 一、鶏舎の止り木はニワトコに限る。足を損することなし。
- 一、小鳥が足を煩ふた時は、ニワトコの若芽を足の兩方にあて縛つて置けば一夜の内に治る。
- 一、鳩は食料として鹽分を求むる也、故に餌に鹽を入れよ。
- 一、猫の病氣には木天蓼（またゝび）を食はせるか又は銅をけづつて飯と一しよに食はせる。
- 一、犬の病氣には小豆を煮て食はせると大抵は治る、又瘡は硫黄華をつけてやればよい。
- 一、鶏卵は午前に産めるは雄で午後には産めるは雌也といふ、大に考ふべし。
- 一、牛（或は馬もか？）の風引で頬はれ咳出づるには、ハコベ（葉糖）茶を石臼にてつき搾り、其汁を茶碗一パイほどへ梅酢を盃に一パイほど加へ七日間も與へれば必ず治るなり。

- 一、猫を集めるには、マタタビをくすべて其臭氣を放つこと。
- 一、鼠を集めるには高野豆腐を焼くこと。（燻べる）
- 一、小鳥（紅雀、胡錦鳥、錦華鳥、十姉妹など）風邪をやりますため膨んで動作がニブり、飼を食べやうともしないときは風邪にかゝつたのです、又ジクジク鼻汁をたらすこともあります。
治療法は半日位水をさらして、アスピリンを少量水に浸すか又はトウガラシを刻んで水に浮かして與へれば大抵二三日で治る。
- 餌は茹でた卵黄一個に付茶種、荏胡麻各一個の割に混合したものゝ外にボレイ粉を忘れず與へること。
- セキセイインコには、粟、稗、黍の内藜をウント殖して與へ、他のインコ類には麻の實を七割位混ぜてやる、何れも日中は直接日光の當らない南向の椽側に置き、夜間は室内で毛布か布をかけてやること。併し殊更に室を暖める必要はない、自然の方法が一番よい。

爪の汚れと割れ易い時

一、指先の爪がきたなく汚れた時は、レモンを加へた温水に暫らくつけておいてから洗ふとキレイになる。レモンの割合は水三合にレモン汁大匙一杯でよし。又爪がカサ／＼して割れ易い人は毎日オリーブ油を塗布しなさい。

狂 犬 病

一、狂犬病の毒は狂犬に咬まれた時から起り猛毒ですが、故に普通の石炭酸、昇汞の如き消毒劑にては容易に死滅しません此際には橙汁又はクレオリンの二十倍液を咬傷部に塗るを良とす。

蚊捕り線香製法

普通は除蟲菊の花及葉莖の粉末に「タブの木」(イヌクス)の粉末を混じ青竹(マラカイドグリ)を加へたる湯にて煉り壓搾器にて絞り出し適當の長さに切りて乾燥したるものなり。蚤取り用の除蟲菊粉は二九一頁参考のこと。

萬 秘 法

一、身體やせる秘法

山椒の實を一日十粉づつ服用すれば、如何に肥へた人も次第にやせること請合である。

一、眉毛を濃くする法

半夏(カタボソ、ホソクミ)一味を粉末として之を局部に摺りつけますと大効があります。

一、わきが(腋臭)を治す法。

枯礬一匁、單寧酸一匁を水一合に溶いて之で腋下をよく洗ひ、更に甘草二分、バラ水四匁、水楊酸三匁を混合したものを局部にぬりつけて置けば忽ち治すること妙なり。

一、口の臭きを治す秘法

鹽酸加里一オンスと水六オンスとで液を造つて、之で口中を洗へばよく治ります。

一、皺のよらぬ秘法

犢牛の生肉を以て毎日怠らず顔を塗擦すれば如何に年を取つても皺の寄ることはありません。一、百日百夜睡眠せざる奇法

牡蠣三十匁、人蔘三匁、茶二匁を細粉して之を一日に三回一回に二匁づつ服み、そして清水で

時々眼を洗へば、百日眠らなくても身體は決して衰弱することはありません。

一、鶏に多數の卵を生ませる法

鴻利鹽一オンスを水一グラムに溶かし、之で煮た馬鈴薯をこねて餅の様にして鶏に與ふことを怠らなければ、よく多數の卵を産むやうになる。

一、朝顔の花に鮮明に文字を現はす法

紫の花に酢を以て書く時は鮮やかなる文字赤くあらはれること妙なり、信仰家に利用せよ。文字繪畫自由自在也。

一、養魚池にイタチのついた時には

胡椒を紙包にして池の四圍に棒に立て、置けば再び來らず。

一、茄子の多收、結實を多くするには

初花は皆切り捨て二度目の花の咲く頃、澤山の肥料を施すとよい、多收あり。

一、牛乳模造の新法

精米五勺、黒焦にならぬやうに炒つて洗ひ、釜に入れ水四合を加へて二合に煮詰めて上澄をす

くひ取り他器に移し(其際カスを取る勿れ)其微温の間に鶏卵四個、白砂糖五勺、重炭酸曹達五分

食鹽二分を加へてよくかき交せて後、布にてこして用ゆれば牛乳に優る良品となる也。

一、刃物の錆るのを防ぐ法

米糠をいつて箱に入れ其中にさし込み置けば何年たつても錆ることはありません。

一、表具糊の製法

蔓珠沙華(ヒガンバナ、シタマガリ、死人花)といふ草の根を叩いて表具糊に混ぜて用ゆると極めて柔かく而かも糊放れはありません。

一、インキ消し液製法

稀酸と枸橼酸を同じ分量に混じて作つたもので、之がインキ消し液である。

一、簡易ラムネの製造法

重曹一勺(四グラム)に砂糖六七勺を加へてラムネ壺に入れて水を加へ、そこへ酒石酸を五分ばかり加へると良味のラムネが出来る。若し香氣を要するなれば酒石酸を入れる前にレモス油を少し入れるとよい。但し重曹と酒石酸を一しよに加へると沸騰するから注意の事。

一、紙石盤の製法

ボール紙を適宜の大きさに切り、之にガラスの粉末と松煙と薄いニカワを混じた物を塗り付けよく乾かして用ゆるなり。(意匠などは後考の事)

一、蛇の來るのを防ぐには

鶏舎なれば塹の周圍に蛞蝓を塗り付けをくか、又は煙草のヤニをつけて置けば來らず、其場所によりては種々と工夫して蛇を防ぐべし。

一、冬季花瓶の凍り破れぬ法

瓶中に少量の灰又は硫黄を混じて置きますと水が凍つても膨脹しませんから器物も破れることはない。

一、墨色を次第に消して行く秘傳

烏賊の墨に生糞糊を磨り交せて書けば、其當時は普通の墨色であつても次第々々に色が薄らぎ三年後には全く白紙になつてしまひます。

一、白酒の作り方

糯蒸米一斗、麴四升、清酒一斗の割合で桶に入れて二十日ばかり密閉して後に白で挽くなり。

一、葡萄酒の製法

葡萄汁三斗、砂糖一貫匁、酒石酸百匁、アルコール三斗、水三斗の割合に混じ、その器物を密封して置きます。

一、酢の腐らぬ法

酢は其中に焼き鹽を少し投じて堅く栓をして置けば決してカビたり腐つたりするものでない。

一、本染、藥染の見分け方

本藍染布は酢につけても剝げ變色せぬが藥の早染は剝げるなり。

一、葡萄酒の製法

三斤ほどの葡萄を搾つて四升の水に混じ、之に白砂糖半斤加へてよく漉すのである。

一、蜜柑酒の製法

酒精一升到蜜柑の皮五個分を入れて七合程に煎じ冷し、之に酒石酸二匁、白砂糖八十匁を加へ木綿で漉せば、美味な蜜柑酒が出来る。

一、レモン水

白砂糖百匁に水三合を加へ、文火にかけ煮沸したる後、更に酒石酸一匁を混じて絹布で濾し、之にレモン油三分位加へること。

一、リモナーデの製法

橙の絞汁を布片で濾したるもの百匁位に白砂糖百五十匁を加へ文火にかけて徐々に煎する。

一、山葵の代用品製法

山葵の代用には、生薑を卸してそれに辛子を等分に合せて用ひると同じ味があるなり。

一、酒の變味を直す法

變味した酒一升到にマグネシヤ一匙ばかりを投入してよく攪拌し、一晝夜ほど靜かにして置けば其風味舊に復すなり。

一、酒の徳用法

酒三合を沸騰するまでに熱し、後に水五勺の割合で加へてよく攪拌し出せば、却つて酒氣が引立ちて非常に徳用なり。(此水の割合は實物に就て考へ合はせること)

一、醬油を殖す法

うどん茹で湯一升、味噌豆の煮汁一升、鹽五合、砂糖蜜若干をよく和合せ、二三十分間火にかけて木綿袋で濾し冷却した時に、同量の醬油に混入し密封して七日間後に使用する。尙之に辛子粉を袋に入れて容器中につけて置けばカビを生ずることなし。

一、萬年酢の製法

壺に酒一升入れ之に切り餅二つよく焼いて酒の中に入れて五六日間置きますと強い醋になりますから用ゆる時には小さい柄杓で入用だけ汲み出し、後へそれだけ水を入れます。いつまでも盡きません。

一、襦袢や着物に汚れ目又は變色した時に

小匙一パイの蓚酸をお湯五合にて溶いた液で洗ひ、後に水洗ひすると落ちます。又下駄の表が汚くなつた時にブラシで布目の通につけ洗ひ落し乾布で拭けばツル／＼するやうになります。

横

疝 (ヨコネ)

- 一、鹿の角（如何に古くもよし）を削り霜として飯糊（ソクイ）にて混じてねり、横痃の上に貼り付け、一日一回四時間以上、毎日貼ること。（但し引締めることあり）
- 一、衣類の汚染したる時は直ちに洗へば此上もないが、然らざれば鹽を少し砕いて塗りつけて置き後に洗へばよいなり。

癰、疔、癩疽、癪

- 一、これ等の腫物一切には、黒揚葉の蝶の胴體をすりつぶしてゴマ油にてねりてつけよし。
- 一、生百合の根をそのまゝすりつぶして鹽を少し加へ患部へ貼れば口が早く立つて治り如める。
- 二、卵（鶏）の甘皮を貼つてよし。
- 二、ドクダミを蒸し焼にしたものと「鳥もち」をねり合せてつけてよし。
- 二、トリカブトの根を煎じ、其汁にて患部を洗ふ。
- 一、生耐の體を三枚におろして肉の方を患部へはる。
- 一、蝮の霜は疔に特效あり。

- 一、櫻木の甘ハダの霜と五八霜を等分に押しませ疔腫の頭につけてよい毒忽ち去る。（癰も同じ）
- 一、これ等の腫物に生蝨と砂糖薬は大に効あり。
- 一、鹽鮭の頭をゆでて其汁にて癩疽を幾度も洗ふてよし。
- 一、癰、疔には蛭、梅干肉の二品を霜にして痛む所につけてよし、立所に痛みが止まる。
- 一、大山椒の葉、天南星の花、小豆の粉。右三品ねり合せ、癪の周圍につけてよし。
- 一、癩疽にはアラメの霜と鳥モチとねり合せつける。
- 一、田蠅三つと小豆の粉をねり合せ、癩疽につけてよし。
- 一、蛔虫を水で洗ひ、割いて癩疽を巻いてよし。（尾長虫もよし）
- 一、癩疽には、野蒜の霜を猪の油にて煉りつけてよし。
- 一、同上には、鍋すみと鳥もちをねり合せて貼るとよい。
- 一、白砂糖と蝸を竹筒に入れ置き、其の汁をつけてよし。
- 一、癩瘡及其の疼痛に蒜は大効あり。
- 一、海老の眼球を集めて適宜煎用するとよい。

- 一、椎茸の霜をねりて癰、瘰、癩につけて能く吸出し効多し。
- 一、蛭を瘍疔に吸ひ付かせれば、二三回にて吸ひ出し治るなり。
- 一、「げんのしょうこ」の葉莖の搾汁で腫物を洗ふと、傷口が早く治り、其の痕を小さくするといはれて居る。
- 一、癰疔が出て痛み甚しきときは、鹿角を削り霜として、飯とねりてソクイを作り、夫れに混ぜてねり、一日一回四時間以上貼付すると奇効あり。

丹

(地方名ハヤクサ)

- 一、丹毒の創所へ水をつけること即ち水分を與ふことは大毒也、嚴禁す。これは順次蔓延するが爲也。
- 一、生鰓を竹ヘラにてかき取ればヌラク／＼がとれる。それを丹毒のはれた所にぬれば大効あり。
- 一、澤蟹の絞り汁をつけるのも効多し。
- 一、生蟹がない時は乾した物でも粉にしてつけてよし。

- 一、連錢草(カキドホシ)をすりつぶして患部の上につけるとよい。
- 一、丹毒にかゝつた時は、肉類魚類の多食雑食を避けよ。凡て動物性の食物は不可也。
- 一、菜の葉をすり潰して其汁を赤色部及腫脹部へぬるとよい也。食物は玄米か玄米スープを多用せよ。

- 一、五ツ葉(梅花黃蓮、バイクワワウレン、ゴカエフワウレン)を霜にして患部へつけてよし。

◎ 丹毒の地方療法

- 一、丹毒を近江國にてはハヤクサと云ふ。
左右の肘を折り屈めて肩との真中(俗に力癩)といふ所を口を附けて強く吸ふべし、是療法也。輕きは血出て重きは黒血出づる也。二口三口程吸ふときは血出づるのも也。若し手後れか、血出ざる時は双物にて其上を少しハネ切るべし、而して吸へば血が出る。若し夫れにても驗なき時は左右の足の親指を元結にて四、五遍緊結し置きて、はへ際(爪の)と七ツ毛の間をハネ切り血を出し其儘元結を解くべし大効ある也。(七ツ毛とは手足の指に生する柔毛のこと也)
- 一、丹毒の民間療法

○大根の生葉をすりつぶして患部へぬること。

○辨慶草の種子をつぶして飯粒でねつて膏藥の如くしてつける。

○浮萍（ウキクサ）を餅の如くついて患部につけるとよい。

○ミツコケ（水苔）も同上なり（青海苔のこと）

◎ 丹毒病の原因其他

一、皮膚又粘膜に明かに表在性に来る。

一、連鎖状菌によりて起る。

一、皮膚粘膜の損傷部分から、この病原體が浸入して淋巴装置を傳ふて周圍に廣がる。

一、消毒法が完成してゐる今日では左程のことはないが、尙ほ充分の注意を要する。

一、部位は顔面頭部を犯すものが最も多い。

一、發病は悪感戰慄を以て四十度乃至四十一度に達する高熱を以て發す。

一、本病は二三日にして頂上に達し、かくて治癒に赴くのが普通なれども併發症あれば注意を要す。此の合併症は急性腎臟炎、化膿性中耳炎、化膿性腦膜炎等であるが、其人の體質により發

病し易き人と然らざる人とあり。

一、潜伏期は十二時間乃至三日とせられるが大抵は五日乃至九日位で治療の目的を達して治る。

一、丹毒は、皮膚及皮下結締織の瀰漫性炎症で、局部は腫脹して且つ著明に潮紅し、而して周圍

に顯著の境界を劃して、遠心症に進行するのが特異である。

一、丹毒病人の食物は一切の魚類（生、乾魚）は不可也。エビ、蛤等の如きは可なり。

一、丹毒は濕氣を厭ふ而已ならず、冷めたい風や水使ひ等は一切不可なり、注意が第一。

一、老年性の丹毒は總じて輕症なりといへり、一面には壯年者の本病は重症多し。

一、老年性丹毒は概ね輕し。

脱腸

一、脱腸に藥なし、故にビクター脱腸帶乃至はスチール脱腸帶を用ゆる外なし。

打撲症

一、餅又は鱈のヌラクをつけるか、又は鱈をすり碎いてつけてよし。

- 一、打ち身で痛が甚しければ、其患所を熱い湯に入れて辛抱すること、即ち痛み去るなり。
- 一、大根を卸し、打身ではれた個所を其中につけてよし、一夜幾時間でもつけて居ればよい。
- 一、牛糞を日乾して布に包み、熱湯に浸し、包みたるまま温いのを痛所に當れば奇効あり、臭氣に耐へよ。
- 一、キハダ、酢、卵白を程よくねり合せ、患部の上に貼るとよい。
- 一、山梔の實五ツ六ツ皮をむき、水を少し入れ煮立て汁を絞り其カスを捨て、ウドン粉と鶏卵の白味を其汁でよく練り之を紙に伸べ、打身の痛む所へ貼り、乾き切らぬ中に又貼り替へると、二三日で治る。(キハダにてもよし)
- 一、メリケン粉三グラムに粉末カラス四グラムと、キハダの粉末三グラムとを鶏卵の白味で溶いて丈夫な紙に伸し痛みの個所にはると良い。其上を罨法すると尙ほ良く利く。
- 一、挫き身をした時同上。
- 一、生姜をおろして絞つた汁と酒を等分にませて、ウドン粉でねつて貼ると大効あり。
- 一、萎梨(アマドコロ)の地下莖を乾燥したのを粉として打撲症に塗布すれば大効あり。

煙草の酔い

- 一、砂糖水をコップ一杯ほど度々呑むとよい。
- 一、甘草を其の儘かひとよい。
- 一、少量の味噌をナメルとよい。

膽石症、肝臓病

大抵夜起る。膽石症痛といふて右乳下の痛みは特有なり、數時間の後には治ることあり、脈は早く弱くなり氣が遠くなるといけいれん(胃瘧)を起すなり。この病は胃潰瘍と異なり胃痛は伴はず、然れども一命の危険はないなり。この病は糞便を調べよ。

- 一、梅干一個、姜の卸汁を加へて醬油を六、七滴入れ熱い番茶を入れて注ぎ、飯茶碗で一二杯のみます。
- 一、芥子泥と熱湯濕布を水落ちから下腹全部にホウタイするとよい。

- 一、大根卸しは非常に大効がある。即その作用で膽石を溶かすものなり。
- 一、ドクダミの葉の煎用も効あり。
- 一、無花果の實を食べると効あり。

◎ 肝臓硬變症

一、原因はアルコール中毒が最も多い。
更に進めば臍の周圍に靜脈が膨脹して海蛇頭といふクネツタものが出來ます。これ本症の特徴なり。

○ 蒜、トマト、南瓜を始終食べると大に良い。

○ 枸杞(クコ)の根を煎じて飲むと大によい、肝臓の熱を去るなり。

一、白屈菜丁幾少量、蒜等を常に用ゆること。(肝臓病一切に)

一、カワラヨモギ(茵陳蒿)、アマヨモギ、コギ、フナハ、シロヨモギ、ヒキヨモギ、ネブミヨモギ(の葉莖)を陰干したものを一日に二―四匁を煎用する。(肝臓病)

一、鯨の味噌汁を用ゆ。(同上)

一、鐵の粉を布袋に入れ甘酒の中に詰めて甘酒と共に煎用するとよい。(同上)

一、蒲公英(タンポポ)、タンポポ、タナ、クヂナ、クヅナ、ワウクワ、フジナ。(同上)

一、鮎を多く食用すること。(同上)

一、膽石病には

半搗米、胚芽米の飯に鹽鮭、油氣を多く加味せし野菜物、痛むときには梅漬に番茶を飲むとよい。
大根の卸し汁は膽石に妙効なり。

一、水落ちの直ぐ下、肝臓の部分が痛むのは膽石と見てよい。

胎毒

一、ニハトコの若芽十匁を土瓶に入れ水五合にて三合に煎じ、この汁で一日三四回患部を洗ふ。

一、杉の葉の霜を茶サジ一杯づつ一日二回呑む。

一、ユキの下(虎耳草、雪の下、金銀草)其葉をもみて汁を取り、これに亞鉛華末を加へて煉り合せ患部に塗布す。

- 一、ドクダミ十三匁を水三合で一合半にせんじ、一日三回に分服する。
- 一、蔞の根三匁を土瓶に入れ、水二合を加へ一合に煎じ、一日三、四回に分用する。

痰を祛る

- 一、猪口一パイの水飴に酸漿の中心三個入れて煉り、それを少しづつ嘗めると治る。重ければ一日に五六回、若し輕症なれば起きた時と寝る時に用ゆればよい。又大根卸しを水飴に混じて持藥としても効能あり。
- 一、紫蘇は痰を切るに妙効がある。

レウマチス (支那名 痛風)

關節レウマチス、筋肉レウマチスの二種病同様の療法なり。(古は此のレウマチスを寸白といへり)

- 一、コブシ(辛夷)の樹皮を煎用するとよい。
- 一、レウマチスと神経痛とは粗ぼ同一なるも、神経痛は痛所がアチコチと歩くなり。

- 一、接骨木の葉、莖煎用はレウマチスに大効あり。

- 一、イヌ山椒(雌椒)は其果實や葉が消炎劑となり、打身や腫物、レウマチスにも効あり。

- 一、本山椒の果實や葉は稀薄少々なればレウマチスにも効あるべし。

- 一、鱈の身に黒砂糖を加へ、つき砕いて貼るとよい。

- 一、レウマチスには蕨の粉をつけるとよい。

- 一、レウマチスにはギンギン(羊蹄、シブクサ、シノベ、ノダイワウ)の根五十匁を大根卸しにて卸し葱の白根五本とクチナシ(梔子、越桃、山梔)の果實三個を加へ共につき交ぜ、更に卵一個を入れメリケン粉一さじを入れてよくかき交ぜ、日本紙の丈夫なものにのばして貼り毎日取かへ入浴時に貼り替へると効多し。

- 一、アマドコロ(菱薺、トコロイモ、甘野花、甘草薺、玉女薺、玉竹)の根をすりつぶしてウドン粉と酢を加へねりませて患所に塗布すればよい。

- 一、燕の霜はレウマチスに効あり。

- 一、目白(繡眼兒、眼白)の霜はレウマチスに効あり。

- 一、脊の下の筋肉の痛むは筋肉レウマチスなり。
- 一、レウマチスや神経痛の根本原因は、身體患部に過剰の尿酸老廢物が蓄積する結果なり。其根本的治療は障害物を速に體外へ排出するにある也。
- 一、痛風と稱するのは萎縮腎などの爲めに腎臓の働きが悪くなり尿酸其他の老廢物が血の中に溜り過ぎて急性又は慢性の關節炎となるものなり。
- 一、オニアザミ(山アザミ、大薊)の葉をウドン粉及酢と共にねりて紙に伸べ、局部に貼れば疼痛を去る効あり。但し一般のレウマチスに特效あり。
- 一、總てのレウマチスは餅と油物を嚴禁すべし、若し食へば跡戻りするなり。
- 一、サルトリイバラ(猿捕り茨、備後名サルトリグヒ)の根に喰入つた虫を搗つて酒で吞めば、一、二疋にてレウマチスに大効あり。虫が無ければこの茨の葉や若芽を取り、細刻して手一足位を煎用しても大効あり。
- 一、レウマチスには白アザミの花、莖、根を搗りつぶして付けて大効あり。

頭痛

- 一、開花時に取りたる川芎又は十二月に取りたる川芎根と子實を煎用すればキレイに全治し、別世界に出たやうになる。
- 一、船、車、馬に乗り酔ふ人は、生スルメを小さく切り絶へずシャブツ居るとよはぬなり。
- 一、通草(アケビ、山女、丁翁)と川芎とを各手一足に切り煎用すれば、頭痛の大妙藥なり。
- 一、野菊の香りの高いのを枕の下に入れて寝れば大効あり。
- 一、大根の卸汁を左なれば左の鼻孔に、右ならば右の鼻孔へ吹き入れると頭痛が治る也。
- 一、水道栓より少し水を出し、二三分間頭へ水をかければ頭痛は治るなり。即ちカユクなつて自然に治るなり。
- 一、編笠をかぶつて其上から冷水をかけるとよいと古書にあり。
- 一、小豆枕は痛くても實行すれば頭痛によい。始めは痛くても後には馴れてトチモ冷めたくて心地がよいなり。

- 一、赤棟蛇（やまかがし）の皮をむいで、乾したのを少しづつ切り朝夕其一片宛を炙食すれば頭痛が三日位で治る、誠に奇効がある。青大将（黄領蛇）も同上。
- 一、野バラ（野イバラ、クヒ）の實を毎夜三、四粒づつ食べると頭痛を煩ふことなしといふ。

悪 咀 （ツワリ）

- 一、醬油番茶か又は大根卸しと醬油とを合せ、それに熱湯をさして吞むとよい。
- 一、胡麻鹽の握り飯は最もよろしい。鹽豆、豌豆、鹽煎餅の如きものはツワリに最もよい。
- 一、伏龍肝といへる竈の中の赤く焼けた土の一片を取り出し、更に火にくべて焼き、之に水をかけてジュンといわせ、其汁を茶碗一パイづゝ服むとツワリによい。但し三回に限る。
（代用品として赤煉瓦を更に焼きて水をかけた汁も同効なり）

寢 小 便 （夜尿）

- 一、蠶の糞十分、鶏糞五分（白き處）此の二品を丸じコロモをかけ、一三十個づつ白湯にて吞むべし、又兎糞も同様用ひてよし。

- 一、寢小便は膀胱神經の衰弱したるものなり。
- 一、鶏の肉臓の霜は寢小便に効あり。
- 一、滋柿の蒂の煎藥を吞ませると効あり。
- 一、野茨（ノイバラ）の花又は葉を煎用して効あり。
- 一、草蓆（トコロ）を乾粉してオブラート又はマンチユウの皮に包みて用ゆ。
- 一、寢小便には山ノ芋を多く用ひてよし。
- 一、陰莖に焼酎を塗りつけ一時間位おいて後に、水で洗ひ落して雁皮紙で包み、其上に味噌を塗つて二時間も置く。斯様に數回すれば寢小便は必治する也。

熱 取 り

- 一、蛙（ヘクソ蛙といふ普通のもの）を取り、皮をむいてはいかぬ臍だけ出して足の裏の土フマズに貼りて置けば（上からホウ帯して）如何なる熱も下がる也。

一、肺炎加答兒などにて熱の高い時は、右のヘクソ蛙二疋の煎汁をのめば熱は確實に下がる也。
(即ち頓挫的に下がる也)

一、地龍(ミミズ)の熱取りは周知のことなり。

一、豆腐を堅目に作り、熱取りに用ゆれば氷以上の効あり。之は何病の熱にも應用し得るなり。

一、熱取りには梅干エキスがよい。(二度目から湯せんにすること。即ち焦付いてはイカヌ也)

一、山葵(ワサビ)を時々食へば、解熱の効充分にあるなり。

一、大根卸し盃に三杯、シヨウガ卸し盃に一杯、醬油杯に一パイを合せ、熱湯を入れてよく攪拌したものは熱取りになるなり。

寝 汗

一、山の芋をすりて食べ、又火に焼きて五六晩食べれば良し。

發熱の原因

發熱するのは

(1) 温中樞又は其傳導路の機械的、電氣的又は温熱的刺戟によりて發す。

(2) 温中樞は甚だ過敏にして障礙を發し易く、種々の化學的、理學的に作用する物質、細胞の崩壞によりて生ずる物質、細菌毒素によりて發熱を來す。

(甲) 化學的物質 食鹽水の靜脈内注射によりて發熱を來すことは周知の事なり。

(乙) 無菌熱及吸收熱出血が組織内に起りたる時。

(丙) 傳染病に來る發熱。

◎之れを要するに、温中樞と外界の冷熱の調和が破れたる時なり。

癩 病 (レブラ)

一、レブラの藥は、大楓子油か又は之を主劑にして精製したものの外、我國にも全世界中にもないが、靑酸加里の主劑たる靑梅の未熟な物の汁を注射すると効ありといふ説がある。

一、黒猫の霜を三指でつまむ位ほど吞むべし必効。

一、肉桂とアケビの皮を煎用し、又は其中へ鹽を入れて洗ふもよい。

- 一、蝮の霜と唇砂(シンシヤ)を等分に混ぜ、細末にして一匁づつ水にて服用すること。
- 一、河豚の毒素を本病に注射して効ありといふ説あり。

落雷死、電撃死

- 一、落雷の時に、其傍に居りて黒くスボリたる時は鮎の肉をすりつけて跡を洗へば直ぐおちて清浄になるなり。
- 一、足裏と臍の周圍にミミツを潰して塗りつけ、大きな聲にて其名を呼へば雷死者は蘇生する。

美人となる法

- 一、イチゴを顔の上でツプして全體にぬりつけ、約十分間其儘にして置き、後に洗ひ落すと美顔となる。
- 一、イチゴの外に熱した桃も同じであるが、之は一時間も其儘にして置くこと。
- 一、牛乳で煮たりんごは、しわ延ばしに非常に効目あり。

- 一、外に指を一本兩脰の間に横に入れて目を閉ぢるとマツ毛は立つ癖が出来て、素敵な明眸なものとなる。

夢精、不感症

- 一、黒大豆を蒸し天日に乾し粉末となし、又黒胡麻を粉にし兩方共にすりつぶし、半々に交ぜ、之れと蜂蜜とねり合せ、茶匙一杯づつ毎日二回分用すること、殊に不感症に効多し。
- 一、別項ニンニクとアルコール漬の利用は本病二種及陰萎症に効多し。

(アルコールは焼酎を代用してもよし、冷暗所の代りに地下二尺掘つてもよし二年や三年は耐へる也)

此のニンニク酒は非常に強いから更に氷砂糖と水にて割り、毎日朝夕服めば感冒や胃腸病にも大効あり、取り分け陰萎病によし。

- 一、石楠木の皮と桑の根の皮各二匁半を土瓶に入れ、水三合を一合半に煎じ一日三回分用(夢精)
- 一、當歸(土當歸、ウド)の根五匁を煎じて用ゆ。(同上)
- 一、キノコツチ(牛膝、フシダカ、トビツキ)の根、葉、莖の煎用効あり。(同上)

ム ク ミ (浮腫、水腫)

- 一、水腫には葱の青い葉を煎じ出した汁で、其患部を度々洗ふてよし、次第に腫が退くなり。
- 一、腎臓で水腫の時は、石菖根手一束に切りて煎じ、茶の如くに吞むこと。
また接骨木の根皮煎用も効あり。
- 一、腰下の水腫には、朝顔の種子煎用、一回二つ乃至五つ位で適當なり。
- 一、全身浮腫には、ウコギの根及アラメの霜、アケビ(通草)の木皮や實の皮等を煎用すること。
- 一、冬瓜は尿を利し水腫を治すものと知るべし。

荒れ止め化粧水

コールドクリームの作り方

- 一、鯨蠟 六瓦 一、精製晒蜜蠟 十瓦 一、ステアリン酸 十瓦
- 一、流動パラフィン油 二十瓦 一、硼砂 二瓦 一、ローズ油 一瓦

一、蒸溜水

十瓦

右の内先づ蜜蠟、鯨蠟、ステアリン酸、パラフィンの四品を瀬戸引鍋に入れ火にかけて溶し、よく溶けて混和したら火から下し、十瓦の水を加へて溶かし、かきまわしながら硼砂液を徐々に加へ、充分混じつてからローズ油を加へて冷める迄泡立器でかきまわしてゐると、段々濃くなつて来て、白色のコールドクリームが出来上るなり。

胸腹の卒痛

卒かにコワバリ痛むものは、

- 一、焼酎に鹽少許入れて服用す。
- 一、温酒に生姜の搾汁を入れて吞むとよい。
- 一、葱白根を濃く煎じて吞むとよい。
- 一、本病の灸は、中腕、天樞、氣海の内一つ鳩尾を撰む。
- 一、延胡索を粉にして酒にて服すべし、難症も必治也。

- 一、ラツキヤウの生物十匁を薄く切り、五匁の水に入れ軟くなるまで煎じ、これを布巾で濾し其汁を一度に服用す、飲みよく効あり。(腹痛)
- 一、腹痛には、炒り鹽二合を日本紙の厚紙袋に入れ、臍の上にあて、其上からヤケドしないやうに火熨斗で温めるとよい。効多し。

ビタミン

- 一、ビタミンは食物中の一成分で極めて少量で足りる。しかも生物體の生活に缺くべからざる養素である。
- 食物は従来、蛋白質、脂肪、含水炭素、無機鹽類の四要素からなるとせられ、之を主要素といひ、ビタミンはまた副要素といふが、その作用の上から主副の別は當らない、寧ろ總て同列に置くべきものだ。
- 若しあるビタミンが食餌中に缺乏すれば、一定期間に其の動物に(植物でも)特殊の障害が起る。

ウラ虫退治の事

- 一、手足のウラ虫(掌又は足の裏に出来るもの)には槐(ニガキ)の甘皮を燻べて其煙を患所へ多く當てると奇効あり。

のぼせ

- 一、常に逆上する癖ある人は野菜人參を常用せよ。
- 一、ウコギの葉を茹で浸し物にして食用すれば、ノボセと脳病に効あり。

腦溢血 (腦膜炎、腦病)

- 一、ウド(土當歸)の根を春彼岸に取り、二十四時間水に浸してから外皮を去り、二寸位に輪切りにして再び一ト晩水の中につけた後、日光にあてて乾し、後にこれを煎用すると効あり。
- 一、棕栢の毛五匁位を一回分とし、水四合で三合に煎じ一日三回に分服するとよい。

一、腦膜炎には、澤蟹の搾汁を二三滴吞ませれば大効あり。また霜にして一回一とツマミを三回服用してよし。

一、海鼠(ナマコ)を常に食用すると腦の病に大効あり。

一、腦溢血(中風、中風の原因)の治療法としては、往古より現代に至るまで腦溢血療法として理想的及學理的の療法なし。然れども多く用ひられてゐるものは左の如し。

(イ) 氷巻法 (ロ) 瀉血法 (ハ) 採血法 (ニ) 洗腸法 (ホ) 下劑

(ヘ) 沃度劑内服 (ト) 下肢芥子泥貼用 (チ) 食餌療法 (リ) 絶體安靜法

但し血壓百二十ミリメートル以下は安靜を要せず

右(イ)より(リ)までの解釋

○氷巻法は血液を凝固せしめ、血管收縮を起すを以て却て害あり、凝血は吸收困難なり、機能障害を起し、半身不隨に陥り快復困難なり。

○腦出血又は腦溢血に罹りたる時は、氷巻法を嚴禁すべし、血液を凝固せしむ。

○酒や煙草をやめ、便通をよくし、肉食を絶ち、海藻や野菜類を多食し、身心を安靜にし、常

に昆布を生のままかちり、柿を食し、血壓を下ぐるやう注意すべし。

一、腦溢血の食料

平常に食養生が大切、大酒と甘き物は血管を脆弱ならしめる。

血管の強力を増すものは胡麻油料理、半搗米、鹽草類、皮はた付の野菜物、醬油、番茶等がよし。

一、腦溢血には蛇のヌケ殻を煎用してよし。

◎腦溢血、中風、高血壓といふ病の原因

一、酒とたばこを過飲する人。

二、古き梅毒病、潜伏性梅毒の人。

三、房事過度、精神過勞の人。

四、肉食美食、運動不足、肥えた人。

五、腎臟病、老性神經衰弱の人。

等である。

- 一、兩耳の後や頸部などに一個所十五疋位の蛭をつけて血を吸はせ、女人の腦溢血を防ぎ、大に輕快して全治に近いものになつたといふことなり。
- 一、湯たんぼを入れて足や大腿部に芥子泥をはつて、其の方(即ち下肢に充血させ)へ血液をひき寄せてよい。本病にはこの動作治療が必要なり。
- 一、胡麻の實は腦を強くし、腎によく、凡て體によきものなり。
- 一、腦溢血と蛭療法は適法なり蛭を五十から七十位、右肩の上部へ(頸動脈の處)つけるとよい。

農業用藥劑

一、馬酔木煎汁

馬酔木 (生葉及生小枝)

五百匁

七升

製法 馬酔木を少し搗きて水を入れ、四十分乃至一時間煮沸す。而して後六倍——八倍の水にて稀解して使用する。

一、蔬菜の葉裏に白子といふ白い虫が一面につき萎縮することあり。其時には漆(ウルシ)の葉の朝露のある時に採りて白子の上にかけるとよい。

一、蟻を去るには石炭酸、ケレソート、硫化炭素、樟腦等の香氣強き藥品を其通路に置く時は逃れ去る也。

又一方其巢に熱湯を澆ぐもよし。

又一方人髪を薫焼するか、或は通路に塞ぐかするも可也。

又三十乃至三十五グラムのモールス氏殺虫精を取り、之に半リットルの水を加へ注ぐべし半時の後には死滅するなり。

一、樹木に寄生せる普通の「アブラムシ」「だに」の介殼虫を殺すには

○水一リットルに二十グラムの中性石鹼(若くは二十グラムの油酸)に二十グラムの「アンモニヤ水」を加へ、更に三十グラムのモールス殺虫精を混合して用ゆ。

一、蠅虫、甲虫、蟻、血蚜虫、介殼虫を驅除するには
○水一リットルに付、五十グラムの洗濯シャボン(或は五十グラムの油酸)に五十グラムのア

ンモニヤ水を加へたるものへ更に五十グラムのモールス氏殺虫精を混合して用ゆる也。

◎モールス液製法

百グラムの除蟲菊粉に二百—二百五十瓦のアルコールと八十—百瓦のアンモニヤ液を加へ、練り合せて餅となし、二三日を経て之に一半—二リツトルの水を加へ、砂皿の上に四十時間之を煎じ、冷却後布片にて濾過し殘滓を去り、暗褐色の煎汁を得べし、之をモールス氏殺虫精といふ。此に石けん水、酸化銅、アンモニヤ等を適宜加へて諸種の害虫を驅除する也。

◎木灰汁の作り方は、水一斗に一貫匁—一貫五百匁の木灰を溶解して液として使用する。即ち石灰乳と同様の價值あり。

一、害虫植物の殺虫劑

○クララ（苦參、ウジコロシ、マヒトリグサ、キツネサ、ゲ、クサエンジュ、ウシグサ、ミツナラシ、山馬蝗）の葉を乾燥し、碎いて粉末とし、害虫に侵された植物に撒布して殺虫劑とする。

一、煙草石灰液は

煙草粉 三百匁 生石灰 一貫匁 水 一石

○即ち生石灰を桶に入れ其上に煙草粉を撒布し、水又は湯（なるべく湯を可とす）を少し入れ石灰を消化し其熱にてニコチンを浸出せしむ。即ち水二斗を加へたるものを原液とす。

一、煙草浸出液は

煙草粉 二百五十匁 アルコール 一合 水 一升

○即ちアルコールに水を加へたるものに粉煙草を入れ、二晝夜間密閉浸出せしめたるを原液として使用の際は適宜稀釋して用ふべし。

一、馬酔木の煎汁

(1) 馬酔木三十匁と水一升五合の並用。之を四倍にのべて使用する。

(2) 馬酔木葉又は樹皮百六十匁と水五升にて煎じ、之を三倍にのべて使用する。

(3) 馬酔木生葉一貫匁、水一斗三升を煎じ、之を十倍にして使用する。

一、馬酔木劑は一般に蚜虫の如き軟體害虫に有害にして、且つ家畜のダニ、ハムシ、ケヂラミにも効多し。

一、馬酔木葉は主として地中の害虫に有効にして、生葉を細断し、反當り百貫匁の割合にスキ込むべし。(堆肥關係を考ふべし)

一、白菜及大根の早期栽培の場合生ずる心食虫の防除は除虫菊の木灰が最適當なり。

一、桃葉浸出液 桃の生葉と若芽百六十匁、水六升、これは釜に水六升と生桃葉を入れ煮沸二升位に煮詰め四升の水を加へて使用する。

一、鐵砲虫(天牛ともいふ) 驅除法

○百部(ヒヤクブ、ホトツラ、ツルヒヤクブ)の根八匁に石鹼十二匁と水四升等を約三十分煮沸し、濾過して別に作りたる石ケン液と混合してよく攪拌す。而して更に水三升を加へて使用する。使用個所は食入道路に挿入して有効也。

一、除虫菊浸出劑

除虫菊粉 二十匁 石油 一升

○右を混合して二晝夜密閉して浸出し原液とし、任意稀釋して使用する。

一、温室植物用 除虫菊液

除虫菊粉 三匁—五匁 温湯 一升

○湯の中に菊粉を入れ攪拌して使用する。

一、除虫菊硫黄合劑

硫黄華 二十匁 除虫菊粉 十匁 水 一斗

○硫黄華を適量の水に入れ煮沸溶解し、除虫菊粉を混じ攪拌して水を加ふべし。但し水は全量にて一斗とす。

一、除虫菊煎汁

除虫菊葉莖 十五匁 石油 一合 水(湯を可とす) 一升

○石油に菊粉莖を浸出したるものに湯を加へ攪拌すべし。而して使用するには十倍内外に稀釋すること。

一、タバコダスト

本劑は煙草を昆蟲の觸角に感ぜぬ程度に微粉したものである。果樹園、花卉園、温室、温床等の木虱、ムクゲムシ、アブラムシ等の驅除に適する。本劑使用は撒粉器に藥劑を入れ、早朝葉

の上に露の存する際無風の日に撒布する。又本劑は諸樹の植付に地中の害虫を驅除する効がある。

此調劑は

タバコダスト 一ポンド 石鹼 四十匁—六十匁 溫湯 五升

○像め所定の水の中に石ケンを入れて溶解し置き、それに煙草ダストを入れて十分に攪拌して後使用するが、濃厚であるから害虫の種類に應じ稀釋して使用すること。

適用害虫

一、メロンの害虫即ち蚜蟲 本劑を其まゝ

一、蛭蟪及び蝸牛 同上

一、接觸劑

石油 一升 石鹼 十二匁—十五匁 水 五合

○右を原液とす。之を實地適用には左の通り稀薄使用のこと。

○蚜蟲類 二十乃至二十五倍

○綿蟲類 十五—二十倍

○介殼虫類 三—五倍

○軍配蟲、浮塵子、木虱 二十五倍

○青蟲、カブラバチの幼蟲 二十一—二十五倍

○食葉甲蟲の幼蟲類 十五—二十倍

注意 本劑は室外にて調製すること。

本劑は晴天無風の日に擇び、開花時には撒布せぬこと。

右石油の代りに種油、桐油、荏油、魚油を用ひてよし。其際は石ケンを四五十匁用ゆること。

一、地下莖消毒のこと。

即ち百合、馬鈴薯、甘藷、コンニャク等は植付けける時に、三十分間ほど左の液に浸漬して後に植付く。

木灰 一貫—一貫五百匁 水 一斗

右二品混合液

一、土壤殺菌用には

木灰 一貫五百匁 水 一斗

調法は適宜の容器に入れ、之に徐々に水を加へ攪拌したるものを、坪當り一、二升の割合に撒布し、土壤面を深さ五寸位に耕鋤すること。

一、柑橘青黴病には、食鹽一合と水五合の割合にて溶解したるものを施して効あり。

一、砒酸鉛は其害を蒙り易ひから葡萄、梅、桃、杏、李、大豆、小豆、落花生等には全廢するか或は少用のこと。(人はマスクをかけてせよ)

一、アセボ(馬酔木)の皮三十匁を水一升五合に入れ五合位に煮詰める。尙使用の際は三倍に薄める。之に石灰、硫黄、煤などを混入すれば一段の効力あるなり。

一、交讓木(ユヅリハ)は驅虫劑となる。

一、除虫菊加用石鹼合劑

石鹼 二匁 除虫菊 二匁 水 一升

但し石ケンはいボリイの如きものを削りて水に混合したものがよい。而して除虫菊粉を混じ

て一晝夜放置する。其後必要に應じて濾過使用する。

一、除虫菊加用石油乳劑

石油 一升 石鹼 十八匁 除虫菊 十八匁 水 五合

以上混和して更に水二升を加へて使用するもよし。

一、ナメクジは油揚を置いて誘寄せ、其上へ鹽か灰を澤山かけると驅除が出来る。

一、簡易なる農業蔬菜用殺虫劑は、吹いかけの巻煙草の殘品を集めて煙草を出し、それを石けん水と一緒に煮溶し、之を油蟲などの居る處へ注ぎかけると効あり。

一、瓜守といふ虫(瓜の幼少の時葉を食つたり莖に喰ひ入る赤色虫ホタルの如き)を驅除するには、種粕を苗の上からかけてやれば來なくなりませんが、種粕が後には腐敗して白い粉のやうになり肥料になります。

◎ ネザサを絶やす藥劑

一、鹽素酸加里を反當り五―十貫程度、粉末のまゝか又は湯に溶かして如露で散布すれば二週間で効果が見へる。

蚕捕り薬粉

- 一、蓼(タデ、マタデ、ホンタデ)の葉莖を乾燥して蚕の出さうな處の疊の下に敷き込むこと。
- 一、右のタデ乾葉と除蟲菊粉の混合劑を考案すること。



(ク拉拉)

- 一、蚕はバラの香を嫌ふので、バラの香水を数滴床に滴して置けば近寄らぬ。
- 一、苦蔘(ク拉拉)の煎汁は外用驅蟲劑として効あり。
- 一、床一面に新聞紙を敷き其上に青松葉を撒き、疊を半日位、日光消毒してから敷き込むと、ノミに大効あり。
- 一、枳(からたち)の實を五六個寢床の下に置けば、蚕來らず。

- 一、木瓜(マクワウリ)を薄く切つて床の下に於けば虱は來らず。
- 一、床なり敷布の上に鹽を撒いてねると蚕は決して來ません。
- 一、椿の花を乾して燻べると蚊が寄り付かない也。
- 一、松葉を床一面の新聞紙の上に布くこと、或は蓬の陰乾したのを新聞紙一面に布いた床の上へ並べると、のみは近寄らず。
- 一、寢室一面の澁紙を布くとのみは近寄らず。

火 傷

- 火でも湯でも蒸汽でも、其他何の原因でも
- 一、醬油をつけてよし。石灰を胡麻油で溶きてつけよ。
- 一、鯉節を細末にし水にて溶きつけよ。
- 一、水蛭を霜にしてつけよ。水蛭を黒砂糖にて溶きつけてよし。澁をぬりてよし。雲母をはりつけてよし。卵を霜にしてふりかけてよし。手早く石油をふりかけてよし。

- 一、湯焼や蒸気焼には胡瓜の汁をつけてよし。
- 一、小火傷には、酢か酒をつけてよし。
- 一、瓦斯や煙のための窒息には、酢をのませてよし。
- 一、瓦斯や煙の處へ行くには酢を含んだ布片か密柑を含みてよし。
- 一、同上、梅干を三ツ四ツ含みてよし。
- 一、瓦斯や煙に巻かれた時は、地上に這ふて地をナメよ。
- 一、火傷には布苔を霜にしてねりてつけよ。
- 一、卵の黄味を手早くつけよ。
- 一、湯焼には、鮑の貝殻にヌルマ湯を入れ火打石でコスレバ米の白水位なのが出るから、傷所へぬる。
- 一、冷飯と杉の葉をすり交ぜ度々貼りかへる也。熱を取り去り跡もつかず治る也。
- 一、湯焼には、黒砂糖と卵の白味をよくねり合せ、鳥の羽毛にて幾度もよくつけること。尤も乾いてつけ難き時は水を割つてもよい。

- 一、火でも湯でも火傷したときは、椿油か胡麻油か卵の白味をつけてよし。
 - 一、火傷の時は灰を茶碗に入れ温湯を注ぎかさまはし、其中に患部をしたしてよし、指先の火傷などは此法を用ゆれば効多し。
 - 一、湯や粥などに手をさし入れヤケドした時は、水でも米の白水でも充分につけて水をとるかへ冷し切ることが肝心なり。
 - 一、桃葉珊瑚（アヲキ）の生葉をもんで火傷局部に塗布するとよい。
 - 一、紫草（ムラサキ）の根の汁は火傷の特効薬也。
 - 一、硫酸で火傷したときは牛乳にて洗滌れすばよい。
 - 一、火傷を蠟紙で治す法。
- 蠟を鍋に入れ溶いて白い清潔な布を其中へつけて蠟布を作り、火傷の上にピッタリ貼りつけて繙帯し二日に一度取りかへると良い。

薬用物成分調、黒燒不能生薬 (日本藥局方)

- 一、スツボンの中には即ち生血や生脂の如き一番強い殺菌力を持つて居る「タウリン」と稱する特種成分が含まれてゐることが分つたのです。
- 一、牛乳を呑む前に酸類を用ゆれば、腹中にて牛乳が凝固する恐あり。
- 一、ヨモギにはチネオール五〇％にして其他ツヨーン及びセスキテルペン、アルコール等を含有す、葉は約〇、〇二％の精油を含有す。
- 一、昆布其他の海藻類にはヨード、カルシウム、ビタミン、ヴローム鹽類を多量に含んでゐる。
- 一、蒼朮（をけら）根は約一、五％の精油を含有す。精油の成分はアトラクチロールを有す。
- 一、蒼朮油は「アトラクチロール」の主成分なり、室内にて燻蒸するときは濕氣を拂ふ効あり。吳服商は梅雨の候に室内又は倉庫内をイブスベし、最必要なる事也。
- 一、つばぶき ツワブキ酸即ちチメチールアクリルを含有す。
- 一、あせび（馬酔木）葉の有害成分は苦味質アセボトキシシン及「配糖體アセボチン」あり、其他セセボクエルチトリン、アセボプルプリン等を含有す。アセボトキシシンは木部にも含本す。

- 一、たらの木（樫木）成分不明。糖尿病にも特効ありといふ。
- 一、め木（小葉）（コトリトマラス）成分木部にルベリン大分二％を含有す。
- 一、ドクダミ（重藥）成分メチルノニルケトン。カプリン酸あり。精油は臭氣なし。又コルダリシなるアルカロイドを含有すといふ。
- 一、草の王（白屈菜）成分は全草中ヘリドニン、ケレトリトリン、プロトピンの三種のホモヘリドニン、ベルベリン等のアルカロイドを含有し居るなり。
- 一、すざらん（鈴蘭）コンワルマン、コンワルリンの二種のアルカロイドを含有す。本草は心臟病の特効藥にして利尿劑なり。十瓦を浸劑として振り出し内服す。
- 一、はしりどころ（苺岩根）本植物は有害にしてアトロピン、ヒオスチミアン、スコボラミン等のアルカロイドを含有す。藥効は鎮痙、鎮痛藥として用ふ。
- 一、車前草 成分、配糖體アウクピンを含有す。
- 一、紫蘇 成分芳香性にして揮發油アルデピドを含有す。
- 一、榧の實 成分は種子は脂肪油を多含し、葉には揮發油を含有す。其主成分はリモネンにし

てカムフェン、ピネン、カチネン、及セスキテルペンアルコール、トルロールを含有す。

一、霜となし得ざる生藥
木香、藿香、丁香、乳香、沈香、白檀、紫檀、肉桂、柴胡、川芎、馬本草、香薷、龍腦、麝香、羚羊角、甘松、茵陳、青黛、檳榔子、犀角、芒硝、滑石、白蘞、牛黃、薄荷、薰蕪、胡椒、紫草、辰砂、

一、ドクフジ(魚藤) ロテノールを含有す。樹脂狀物質は殺蟲力強きを以て、農業用殺蟲劑として利用せらる。

一、連錢草の葉莖は〇、〇三%の單寧及苦味質を含有す。小兒の疳を取る故に疳取草の名あり。

一、莪述 成分、根莖に大約1%の精油を含む。主成分はチネオールなり、専ら芳香健胃劑なり。

一、苦蔘(クララ、クサエンジュ)マトリンなるアルカロイド約2%を含み、種子には脂肪油一三%及び少量の揮發油アルカロイド、シチジンを含有す。

一、枇杷 種子はアミグダリン族配糖體を含有す。

一、桔梗にはエバニンやブラチコチンと云ふ成分あり。

一、阿片には石膏、澱粉を混和して質造するの惡習あり。ペルシヤ阿片はモルヒネを一五%含有す。

一、せんぶり(當藥) の苦味成分は「スウェルチアマリン」ある結晶性配糖體である。

一、犍牛兒(げんのしやうこ) は主成分は單寧である。

一、大黃の有効成分はクリソファン酸、エモチン等のオキシメチルアントラヒノン等である。

一、芒硝(一名朴硝) は硫酸ナトリウムのこと也。

◎日本藥局方所載 藥用植物

- 1 ア カ マ ツ 松脂 硬膏の原料
- 2 エ ブ リ コ 落葉松茸 菌體 結核患者ノ盜汗
- 3 ヲ シ ダ 錦馬根 根莖 蟻蟲驅除
- 4 カ ノ コ サ ウ 吉草根 纈草根 ヒステリー神經過敏症
- 5 桔 梗 桔梗根 根、晒桔梗 祛痰劑
- 6 葛 錠劑賦形藥

- 7 ク ロ マ ツ
 - 8 ス ギ
 - 9 ツ バ キ
 - 10 ニ ガ ヨ モ ギ
 - 11 テ ン グ サ
 - 12 ヌ ル デ
 - 13 パ ツ カ ク
 - 14 ハ シ リ ト コ ロ
 - 15 ハ マ ナ ス
 - 16 ヒ カ ゲ ノ カ ツ ラ
 - 17 マ ン ダ ラ ゲ
 - 18 リ ン ド ウ
- 杉脂 絆創膏代用 新藥治淋劑
 樟油 オレフ油の代用
 苦艾 驅蟲劑 間歇熱 萎黃病 消化不良
 寒天 粘滑藥 緩下劑
 五倍子 蟲嬰 收斂藥
 麥角 陣痛速進 止血劑
 石松子 皮膚の摩擦部に頒布
 朝鮮朝顔 喘息タバコ
 龍膽 苦味健胃藥
- 一、米糠油の成分はパルミチン酸、オレイン酸、リノール酸を主成分とし、ステアリン酸、ミリ

スチン酸、アラキチン酸等を少量混じて居り、之等がグリセリンと化合したグリセリドであつて不飽和物として微量のフィトステリンを混じてゐる。

一、蒼朮油の主成分は「アトラクチロール」なり。

一、臺灣特産パイヤの實の汁を、牛肉でも魚肉でもフリかけると固いものが柔くなる也。

一、福壽草は根部に「アドニン」を含み心臟藥として用ひらる。

藥用化粧水製法

一、硼砂細末六瓦、グリセリン四分の三オンス、薔薇水八オンスを混じたものを湯で洗ふた後の手足にぬりつければ必ず柔かになります。

一、グリセリンを用ゆる「パルツ水製法」

- ぐりすりん 三〇瓦
 - 七〇%アルコール 三〇瓦
 - 水 一五〇瓦
 - 又一方
 - リスリン 五〇瓦
 - アルコール 五〇瓦
 - 蒸溜水 一〇〇瓦
- 右混合し之に各々苛性加里一瓦を加へて作るなり。

一、荒れ性の人に適するベルツ水

リスリン 五十瓦 アルコール 五十瓦 炭酸加里 二瓦
 硼砂 四瓦 ベルガモット油 一瓦 蒸溜水 百瓦
 炭酸加里と硼砂を水で溶きリスリンを入れ、次にアルコールを混ぜたベルガモット油を少しづつ加へながら攪きまわすと液が白く濁ってくるから、濾紙で數回繰り返して濾すと透明になります。尚ほ濾す前に炭酸石灰十瓦を加へてよくかきまわした上濾すと早く透明になります。

藥草の採集

天氣晴朗の日を選びて行ふものにして、降雨或は濕潤せる日には採取すべからず、降雨日に集めたるものは變敗し易し、乾燥時に黒變すればなり。

チヤタリスの如きは一年以上経過したるものは保存せず常に新らしきものと交新貯藏すべし。一、根及根莖類は老葉及葉柄の落下したる後、新芽の未だ發芽せざる前に堀り出し、皮部は植物の種類によりて異なれども木部より離れ易き時期或は發芽及開花後に脱離するもの也。草本及

葉等は開花後に、種子及果實類は成熟後に採集するものなれども、特種のものには未熟のものをあつむ、花は開花間際に採集す。

○二年以下	十二分乃至十五の一	○一年以上	十分の一
○二年以上	八分の一	○三年以上	六分の一
○四年以上	四分の一	○七年以上	三分の一
○十四年以上	二分の一	○二十年以上	當量
○六十年以上	三分の一	○七十年以上	二分の一

藥劑の吸収を望む場所

(吸収作用)

(一) 消化器 通常藥劑を用ふるには口からのませて消化器の方へ輸るのであるが、之を藥劑の胃内適用と稱へる。消化器は日常外から榮養物を取つて居る場所であるから、之から藥劑を用ひたならば病人が不快に思はぬと云ふ利益がある。然し消化器は榮養品を取るためには申分の

ない場所であるが、藥劑を取る爲には不適當の點がある。(第一)消化器は多くの物質を徐々に吸収するやうな構造のものであつて少量の物質を速かに吸収することは出来ぬ故に、少量の藥劑を速に其効を現はすことを望む場合には消化器は不適當である。殊に胃では吸収することが六つヶ敷、腸にいつて始めて吸収されるものである。(第二)胃は食物が満ちて居るときは殊に其吸収がわるくなるから、其時に藥劑を用ひても効驗が確かでない。故に通常此短所を避けて胃の空虚の時に藥を用ゆるものである。(第三)胃腸の中には常にさまざまの化學的作用が行はれて居るから、其作用が無くなつて居たり或は他の作用に變つたりする。(第四)消化器から吸収せられた藥劑は門脈の中に入り、肝臓を通るものであるが、此肝臓は解毒臓器と稱せらるる程のもので多くの物質を抑留する性質がある。従つて藥劑の中にも茲で抑留されて十分に其働きが出来ぬものがある。尙ほ一つの消化器の短所は、藥劑の吸収が遅いのみならず、其吸収の度が何時も不同で定まつて居らぬことである。

(二)靜脈内注射 此法は直接に藥を靜脈内に注入するのであるから、吸収のことは論ずるまでもなく、藥の全量が一時に血液の中へいつて全身に循環。故に其藥の作用が甚速で且つ甚だ強

い。藥劑の作用は既に注射後數秒時の中に極度に達し、其排泄又は變化するに従つて消へ行くものである。

斯くの如く靜脈内に藥を用ゆれば、其方法はあまりに其作用が速かで危険であるから稀に用ひらるゝ丈であつて、其用ひられる場合は、藥の作用の非常に速がならんことを望むとき、又は之を用ひても少しも危険の虞なく且つ直に血脈の中へ入れなければ特異の作用の起らぬ藥劑のときである。血液を失ふたときなどに食鹽水を血管の中へ注ぎ込む爲に此法を用ゆることがある。

通常消化器に用ふる量の三分の一―四分の一を靜脈中へ注射すれば、消化器に用ひた量と同じだけの効能が現はれるのである。

(三)皮膚の表面には吸収する力が甚だ弱い故、藥の吸収を望む場合は皮膚から用ゆるといふ場合は頗る稀である。藥品の中にも、瓦斯體又は蒸汽體のもの、揮發性の液體、皮膚の脂肪又は角質を溶解する性質あるもの、皮膚に炎症を起すもの并に是等の性質ある液に溶したるものなどは、いくらか皮膚の表面から吸収せられることが出来る。或は以上のやうな性質のものでも皮

膚に細かに擦傷を作つた時、或はひびのやうなものが出来てゐるときは、皮膚から吸収せしめることが出来る。バイ毒の水銀軟膏を皮膚に塗擦するのは、塗擦するときに小傷を造つてそれから水銀を吸収せしむるものである。

(四)皮下注射(静脈注射ほど速かでないが毛細管壁を通らなければならぬからである) 皮下注射に用ゆる量は内服量の四分の三―二分の一であります。

(五)筋肉内注射 皮下に注射して其場所に膿瘍を生じ易い性質の薬剤は、皮下注射器にて筋肉の中へ注射することがある。

(六)吸収器の適用 クロホルムの施用の如し。

◎ 薬剤の種類

第一類 神経筋肉毒

- 一、クロロフォルム及アルコール
- 二、アンモニヤ
- 三、コフェイン

四、ストリキニーネ

五、モルヒネ

モルヒネは人間に「五乃至十ミリグラム」(〇・〇〇五―〇・〇一)のモルヒネを用ふると、外から加つて来る知覚の刺激を受けることが鈍くなり、従つて痛を覚えること、咳嗽することなどが減じ、或は全く消えてしまふが、觸覚は變せず意識の働にも變化がなく睡眠を催すやうなことはないが、後には是等の働も感じて来る。外から来る刺激に感ずることが鈍くなるので眠くなる。此時に精神恍惚として華胥に遊ぶが如く云ふべからざる愉快を感ずるものである。阿片が嗜好品として濫用せらるるのは此原因なり。

六、コカイン

七、ヨヒンビン

八、アトロヒネ

九、ピルカルビン

十、アポモルヒネ

藥草とお灸療法

- 十一、キニーネ
- 十二、アンチピリン
- 十三、石炭酸類
- 十四、ザリツクル
- 十五、樟腦の類
- 十六、チキタリン
- 十七、スファツエロトキシン

第二類 局所の榮養を障害する有機化合物

- 一、粘漿劑
- 二、矯味劑
- 三、茶劑
- 四、汚臭神經劑
- 五、嗅劑

六、芳香苦味健胃劑
 七、泌尿器消毒劑
 八、膏劑
 九、皮膚刺戟劑
 十、植物性下劑

此種は多々あり、之を内用すると腸の粘膜を刺戟し其蠕動を高めて内容物を排泄させる働あり。

- 十一、驅蟲劑
- 十二、鞣酸の類
- 第三類 無機化合物

- 一、水
- 二、食鹽の類
- 三、芒硝 (硫酸曹達) (硫酸若土シヤリエン)

第二章 藥草と救急秘方

藥草とお灸療法
腐蝕劑の作用

- 四、アルカリの類
- 五、硫化アルカリの類
- 六、酸の類
- 七、造鹽素の類并に酸化劑の類
- 八、重金屬并に礬土の化合物
- (イ) 砒素 (砒石 無水亞砒酸)
- (ロ) アンチモンの類
- (ハ) 水銀の類
- (ニ) 鐵の類 (血液中のヘモグロビンの主成分である)
- (ホ) 銀の類
- (ヘ) 銅并に亞鉛の類
- (ト) 鉛の類

(チ) アルミニウムの類

九、磷

第四類 消化醱酵素并に滋養品

- 一、脂肪及消化醱酵素の類
- 二、含水炭素類
- 三、蛋白質類

- | | | |
|-----------|----------|--------------|
| (イ) 肝油 | (ロ) ペプシネ | (ハ) タカチアスターゼ |
| (イ) 糖類 | (ロ) 澱粉類 | |
| (イ) ペプトン | (ロ) 乾酪素劑 | (ハ) 植物性粘劑 |
| (ホ) ソマトーゼ | | (ニ) トロポン |

雙酒の造り方

- 一、反鼻といふのは、皮をむいて日光に乾したものの名稱なり。

一、五八霜とは五月に捕つた蝮又は八月に捕つた蝮を黒焼にしたものなり。

◎原料

- 一、反鼻を粉にした物 十匁(三四疋分)
- 一、丁子 五匁
- 一、朝鮮人蔘 五匁
- 一、龍眼肉 十匁
- 一、肉桂 五匁
- 一、甘草 一匁半

以上六味を焼酎と味醂とを等分に混ぜて一升にした中へ入れてよく混ぜ合せておき、一週間目に晒布袋で濾します、これで出来上つたなり。

- 一、用量 大人一日二勺位、十歳前後が半量
- 一、効能 強壯劑、痼疾、疲勞をせず。

別法 蝮酒の造り方

生捕つた蝮を三疋、一週間位籠に入れて置くと體内の糞便をすつかり排出します故、籠のまま水にてよく洗ひ、別に用意した焼酎一升入りの壺の中へ入れコルク栓をして封蠟をかけ、椽の下などの冷暗所に貯ふ。一年以上も経つた頃には、蝮はドロ／＼になつて居るから取り出し、味醂

と半々に割つて、大人は一日に二勺を子供は其半量を用ふ。

蝮味噌の作り方

前項の如くた清洗し蝮を土鍋に入れ、水を加へながら文火で七時間も煮ると、くたく／＼になつて了ふから、此れに砂糖を加へた味のよい味噌八十匁位(蝮二疋の割合)を入れ、焦げつかぬやう手まめに攪ぜて、充分に煉り上げるなり。

用法 普通なめ味噌の如く三度／＼用ゆる、一週間一疋の割合に。若し生蝮がなければ反鼻でもよい。

効能 實地に經驗するも驚くばかりなり。作る時は臭氣甚だしき故、戸外に於てせよ。要するに強壯劑なり。

◎蝮取り器械のこと

一、空蜜柑箱にガラス板の蓋を作り、底のすぐ上に蝮の入る位の穴二つ(横と側)を穿ち、中に蝮の好む申柿と干いかを各々少し焼いて入れ、この箱を蝮の出さうな所に置くとよく入るなり。

血 壓 の 高 低

一、血圧は心臓が動脈管を通じて血液を送るとき動脈管の側壁に對し壓力を生ずるによりて起る血液循環の速度なり。

◎日本人五十萬人の統計による血圧の自然例は

三 歳以内	五十ミリメートル	十 歳以内	六十ミリメートル
十五 歳以内	八十 "	十八 歳以内	九十 "
二十 歳以内	百 "	二十五 歳以内	百十五 "
三十 歳以内	百二十 "	三十五 歳以内	百二十五 "
四十 歳以内	百三十 "	四十五 歳以内	百三十五 "
五十 歳以内	百四十 "	五十五 歳以内	百五十 "
六十 歳以内	百六十 "	七十 歳以内	百七十五 "
八十 歳以内	百八十 "		

○血圧下降は心臓麻痺なり。

○血圧上昇して血管破裂し、腦溢血となり、或は死の原因となる。

○血圧下降に原因する症状

全身衰弱の結果として極めて微細の脈搏、心悸亢進、チアノーゼ浮腫、寂寥の感に堪へず等なり。

○血圧上昇に原因する症状

頭重、眩暈、耳鳴、重聴、肩こり、心悸亢進、腰痛、胃腸の障害、歩行蹣跚、四肢倦怠、全身諸所の疼痛、關節炎、視力障害、振顫、糖尿病、蛋白尿等なり。

○血圧を下降する方法

瀉血法、誘導法として局部鬱血法、下劑なるも奇妙と見る方法なし。

○血圧の下げ藥

一、犍牛兒「げんのしょうこ」の陰干十匁を一日量とし水二合にて一合五勺に煎じ、一日三回に分服す。

- 一、昆布アラメを生食する。
- 二、棕相の葉を煎用する。
- 三、病的に低血圧の人は糖分を十分に取り、カルシウム劑を連用するがよい。
- 高血圧で卒倒する人は、初老(四十才以上)に達した以上の人です。即ち動脈硬化か慢性腎炎か、潜伏梅毒かの老人は、屢々卒中を起したり頓死したり、又は半身不隨の中氣になる也。
- 小供や少年の時に卒倒するのは血圧は決して(一五ミリ以上)ではなく、反つて低血圧(一〇〇以上)のものなり。

この低血圧の人はてんかんの本體である。常に血圧が低いから時々腦貧血のやうになつて失神する也。

- 血圧が高ければ命短かし。高血圧患者には肺結核は少い、即ち正血圧の人の三分の一なり。
- 一、高血圧の二大別

- 腎臓に故障あるや否の類
 - 第一、腎性血圧亢進性
 - 第二、恒久性血圧亢進性

腎臓に故障ないものが本態的血圧亢進性也。

- 一、血圧の高い人は昆布を生でかみ、又は柿の實を生で多食すると下がるなり。
- 一、高血圧の新食餌療法は、日常食品中から食鹽を禁じ、流血量を制限して危険の勃發を防ぐと共に、血圧亢進を抑制する方法なり、之即ち無鹽食療法です。

負 傷 (怪我)

- 一、指などを刃物或はキカイ等で切り落してツグ(接ぎ合せ)ときには、手早く燃へ火にても有り合せの器物にてすりつぶし、粉にして澤山つけ、前後上下等をよく見合せてクツ付けること、妙について痕もなくなる也、故に手敏く都合よく接る也。冷えた灰にてはつかぬもの也。
- 一、子供のすりむいた時には、薪の火を石の上にてすりつぶし其灰をつけてやるべし即治す。
- 一、鐵類にて負傷し其鐵の破片創の中より出ざるには、鼠肉を焙り細末にして毎日二回一回に三本指でツマムほどを温酒にて用ゆべし、即ち其創所が段々に痒くなりて吹き出すなり、極々痒い時は少々動かしても差支ない也。

- 一、鐵釘のふみぬきには鼠糞を霜にし飯粒とねり合せ、傷口にはると妙に治る也。又尾長虫を霜にして飯粒にてねりつければ即治す。
- 一、針の肉中にたち入りて所在知れざるには、鼠糞を碎いて傷口と思ふ所へ厚く貼り塗るべし。速に吸ひ出すなり。
- 一、庖丁で指などに傷をした時には、食鹽をすり込めば治るが少しはイタイなり。
- 一、切り疵一切の妙藥は、ウドン粉に卵の白味を入れよくねり混ぜて貼るべし。
- 一、頭や手足其他大怪我して藥なきときは、鶏卵の新鮮なものを、ゴミの付かぬやうにして創所へぬるべし、大効あり。
- 一、フミヌキ(水中でも水田でも陸上でも)には油灸をすえること、其方法はツケ木の利用也。
- 一、針などのたちたるには、ミミズの土を去り、はりつけてよし。
- 一、灸いぼりには、百草霜(鍋すみ)を見計ひにてふりかけてよし。
- 一、烟にまかれて苦しい時は、大根を口にふくんで居れば決して苦痛なし。又烟のために一旦息絶えたる人に大根の搾汁を吞ませれば蘇生する。

鶏の病

- 一、辨慶草の上皮をムキ、之を患部に貼つて置けば少しの創痕は治ります。
- 一、ニンニクの青葉をもんで其汁で傷所を押へれば治る也。
- 一、負傷せば先づ一寸鹽をぬれ、痛むともウマぬもの也。
- 一、キルク(コロツブともいふ)の霜はガラスの怪我によく利く也。
- 一、鶏の羽虫や其他の害虫には、種油を布片につけ鶏の體にぬりつけ、殊に首の周圍によく付けてやれば二三日で羽虫は根絶す。(豚油も同上なり)

強壯食

- 一、白木耳(シロキタラゲ)はフィチン及びビタミンDを含有して強壯劑の藥用價值あり。

下痢と下痢

- 一、蛇莓の實及根を煎用すると下痢を止む。

- 一、シボリハラ（裏急後重）には、芍藥の根を煎用のこと。
- 一、下痢にはキハダの樹皮、サルトリイバラの根、野イバラの果實、ヤマノイモ、ゲンノショウコ、オホバコの葉、栲榴、ハブサウ、延齡草（エンレイサウ）などの内一つにても煎用すれば止まるなり。但し出来れば二、三品でも併用してよし。
- 一、小兒の下痢には柿の花の霜を適宜（花の五つ位）一日に三回も吞ませれば止まる。
- 一、下痢止めには、臍に味噌灸、且つ長強と肛門の間に、三灸すれば止る。（第三章参照）
- 一、蛇莓の實を舊五月五日朝露のかかつたのを取り、清水にて一つを吞めば、其年中は下痢することなし。
- 一、朝顔の種子十五粒から二十五粒までを水一合に入れ五勺に煎じて用ゆれば下痢止めとなる。
- 一、急性腸カタル（寸白）には蒜を毎食用ゆべし。蜂の巢一匁を煎用すれば、寸白や寄生蟲は死して出る。
- 一、桐の葉の搾汁を何回にも飲ませること。
- 一、下痢止めには茹卵の黄味と生姜の卸汁少々をかきまぜて白湯にて吞みてよし。

- 一、鮎の霜を水にて吞めば下痢止めとなる。
- 一、鮎を三枚に下し酢味噌で和へて與へるとよい。赤痢や下痢に効あり。
- 一、口無し（秋日に木に下つて居る脱虫後の青い蠶繭様の袋、糸口が知れぬから口無しといふ）と蠶の乾糞とを等分にしてのめば、赤痢や下痢に大効あり。
- 一、牛馬の下痢には、勝栗を粉にして茶碗一パイづつ五六回飲ませれば治る。但し粗製品で皮があつたり澱皮が附いて居てもよいなり。

健康長壽と玄米食

吾人の祖先は上下共寛文の頃（四代將軍頃）までは皆玄米食であつた。米穀には蛋白質、脂肪、ビタミン、カルシウム、磷酸、鐵、鹽等の有効なる營養成分は主として表皮の胚芽の中に存在して居り、内部は殆んど含水炭素即ち澱粉だけから出来上つてゐるのである。それ故、米の表皮及胚芽を糠として除去したものは、前記の營養分を含まず。

月 經

- 一、月經困難には、センブリ七、八十匁を布袋に入れ煎出した汁にて湯浴するとよい。又芥子粉十五匁を布袋に入れ熱湯にてもみ出し、少し熱い加減に腰湯する。
- 一、桑の根皮の煎藥、その手一握を水三合にて一合五勺に煎じ、一日數回に吞む。
- 一、若荷の根の煎藥、手一束を水四合を入れ二合に煎じ、一日三回に用ゆ。
- 一、フヂハカマ（藤袴、蘭草）の手一束を水四合で二合に煎じ、一日三回に用ゆ。
- 一、カラスウリ（王瓜、タマゴサ、キツネノマクラ）の煎藥、前項と同様のこと。
- 一、オモトの根を乾かして刻み、盃一パイ位を土瓶に入れ水四合、文火にて二合に煎じ、一日量として數回食間に用ゆると月經故障によい。若しのみにくい時は甘草を加へて煎じてもよい。
- 一、月經閉止、病的の閉止には、牛膝（キノコブチ、フシダカ、トビツキ）の葉、莖、根三四匁を水三合、文火にて一合半にして一日量とす。
- 一、同上閉止には、蓮の實十五粒乃至二十粒を炒り、三四回に分服する。

一、同上には、アケビの葉、莖、根の煎用有効也。

豚 藥

著者が佐川正雄名義にて警視廳へ届出たる豚藥「ツウオー」の分量は次の如し。

- 一、木 炭 末 五、〇 一、精 製 硫 黄 五、〇
- 一、クロールナトリウム 壹〇、〇 一、重炭酸ナトリウム 壹〇、〇
- 一、硫花ナトリウム 五、〇 一、サルチル酸フェテル 三、〇

右破碎混和し五回分とす。
サルチル酸フェテルは「黒アンチモニー」三、〇瓦と交換しても良いが、黒アンチモニーは劇藥なり。

○輕症は一日一回右の一回分を與ふ、重症は一日三回右の一回分宛を與ふ。

此の藥は豚コレラ豫防劑が目的也。

一、豚の貧血症にはアンモニヤ水を嗅がせるとよい。

一、豚の下痢には、ヨードホルムを一日に〇、二五乃至〇、三〇即ち一瓦の十分の三〇へ芳香酸一、〇瓦及次硝酸着鉛若干を加へて與ふべし。即ち腸内の防腐制秘作用あり、故に結核性關節炎に特效あり、又何日連用せしむるも習慣性なし。

一、下痢止めには

- 單寧酸 〇、二五 アラビヤゴム末 〇、五 頓服せしむ
- ヒマシ油 三〇、〇 頓服せしむ
- 甘 汞 〇、五 重 曹 一〇、〇 一日三回に分服
- 大黃根末 〇、一 阿片末 〇、一 同 上
- 阿片末 一、〇—二、〇 を頓服せしむ
- 阿片丁幾 五〇、〇 グリスリン 一〇、〇 を一日三回に分服せしむ

一、疥癬には

- 百露拔爾撒謨 二、〇 巴拉賓軟膏 二〇、〇 塗布特效藥
- 硫黃末少量を食飼中に混じて與へ、外部には炭酸曹達と石油を混じて塗布す、一日數回。

硫黃末にシヤリエンを混じて食飼中に入れて食用せしむ。

一、豚兒の吐瀉するには

- 〇胡盧末 二ポンド 〇大回香種子 二ポンド 〇龍膽末 半ポンド
 - 〇曹達炭酸鹽 二オンス 〇白聖末 二ポンド
- 右五味を混交して母豚へ一食に付五瓦を與ふ。
- 一、腦充血(日射病)に罹り、人間のカクランの如く横臥昏倒したるには
- 〇吐酒石 一、〇 〇蒸溜水 三、〇 〇芒硝石 五、〇
 - 〇亞麻仁末 二〇、〇
- 右四味を一日三回に分服せしむ。

化粧品クリーム製法

一、ステアリン蠟百グラム。リスリン三百グラム。水四百グラムを合せ入れて火にかけよく溶かして置く、別に瀬戸引鍋に苛性加里十グラムを四百グラムの温湯で溶き、文火にかけたまゝ、

で十分にまぜ、更に前の材料をそろくと加へるとだんだんと固まつて来るから、之にローズ油でもヴァイオレット油でも加へて固めればよい。(苛性加里は注意せよ)

- 一、ニキビや吹出物をとる薬用化粧水
- 一、サルチル酸 一、瓦 一、藥局方アルコール 三、〇〇 一、無臭無雜物の水 二、〇瓦
- 右三品をサイダー瓶一本位に入れて作る。香料はローズカレモンを入れてよし。

船車に酔はぬ法

- 一、櫻の木皮に茄子の蒂を霜にし(兩者を等分に焼く)たのを三本指でツマムだけ白湯にて服用して後乗れば酔はぬ也。
- 一、乗物に酔ふ人は、乗る前か又は乗つてからか三十分間ほど片目をつぶつて遠方を見て居ると酔はぬなり。汽車に乗つてから後方を見たり、船にのつて波濤を見るな。
- 一、乗物に乗る前に梅干を含んでゐるとよい。
- 一、生のイカを嚼んで其汁を吸ふてゐるとよわぬなり。

- 一、船や車に乗つて酔ふ人は、硫黄を嗅ぎ且つ之を臍につめて置く。(柔かき布片に包みてもよし)
- 一、風呂に酔ふた時には直ぐに冷水を足に四五ハイ掛けると治る、卒倒することはありません。

不眠症

- 一、玉葱を多食したり、又寝る時に刻んで枕元に置けば効あり。
- 一、生葱の白身に味噌をつけて食用する。
- 一、蒜をすり卸し其匂を嗅ぎつつ寝ること。
- 一、苜蓿(チシヤ)の葉を澤山生食する。
- 一、梅干三個を食べると、お茶に刺戟された不眠症に効あり。
- 一、堇の花を開花時にとりて乾し之を煎用する。
- 一、蓮根とヨモギを交ぜ煎用するとよい。
- 一、本年の松の芽六七本を黒大豆を一ト掴みと共に炒るやうにして煎じ、鍋を下して砂糖を少し入れて飲むとよい。(但し食間に)

- 一、ノビルやクチナシ等の煎用は効多し。
- 一、暑くて寝られぬ時には(夜分なれば)湯で絞つたタオルで全身を拭き、更に冷たい濡手拭を腹の上に置くとよい。

腹膜炎

- 一、生みたての鶏卵をよく洗ふてコップに入れ米の酢をかけ、一日置いて殻を割り中味を其の酢と交ぜ一日分として三日間のむこと、若し不十分なれば更に二日増し計五日間のむ也。
- 一、生鮓の肉を二三回たべると治る。即ち三枚におろしてサシミの如くして喰ふなり。
- 一、ヒガン花(石蒜)の根を卸し、同量の胡麻油とねり合せ豆底(足のうら)へはり薬とする。



(ヒガン花)

- 一、黒豆療法 鹽を少し入れた煮豆を作つて食ふ。
- 一、本病に蛭療法を施して大効を見た人あり。

婦人病診断

- 一、素人に婦人病の有無を見る第一目安は
 - (1) 月経が順調でないこと。
 - (2) 出血があること。
 - (3) 帯下が澤山あること。
 - (4) 下腹が張りつめたり痛んだり腰がつれたり。
 此等の有無で診断することが出来る。
- 一、子宮後屈の爲めに生命に關することはありません。だから大した障碍もありませんが。妊娠は望めぬ。
- 一、梅毒の有無を検するのは母體血液のワツセルマン反應を検すること。

口中の怪我及腫物

- 一、桑の實を搾り其汁をつける。場所によりては桑の實を押しつけて効あり。
- 一、鯉鱗の霜をつけてよし。
- 一、蜂蜜を度々ぬりてよし。
- 一、口臭は鯉の鹽辛を二、三日連用する。
- 一、口中のたゞれ或は舌のたゞれには
 - 茄子の花の霜をつける。
 - 大根の卸汁か生姜の搾汁をつけてよし。
 - 茗荷の根をつぶしてつけてよし。
 - 黄蘗の煎じたのを含めば口瘡を治すこと妙。
 - クコの根皮の煎汁にて含嗽するとよい。
 - 嬰兒の口中に乳のカスのやうな白いのが溜る(露口瘡)は、後に番茶をのませるか、重曹を十倍の水で溶いて、ガーゼにしめして口中を拭けばよい。母の乳首も同様拭くこと。

○ワラジ虫を飯粒とねり合せつけてやると、不思議によく効く。決して毒にならぬから安心してつけてよし。

- 口臭には川芎を含みてよし。
- 尾長虫の霜を飯粒にてねり足跡に貼れば、口中の糜爛を即治する也。
- 一、葱蒜の悪臭は胡麻一ツマミ食ふか、酢を一口飲ませれば治る。
- 一、梅干の霜を度々塗るか、或は雪の下の葉の生物に鹽をつけてもみ、其汁を口中のアレた處にぬるとよい也。
- 一、口唇の荒れには蜂蜜をぬればよい也。
- 一、口角(兩方共)白くなる原因は、齒齦が悪いか口腔不潔か口内炎か、若くは胃液分泌の異常かである。
- 一、口中に小さいおできが出来たり、頬の内側を齒で嚙んで傷をした時は、昆布を黒燒にしてよくもみほぐし粉にして傷につければ直ぐ治る。但し少しシミル。

翠丸炎

- 一、南天の葉、皮或は實を煎じ、朝夕二度温めてよし。
- 一、本病には豆腐の水を切り摺鉢にてすり、メリケン粉を加へてねり、丈夫な紙にのぼして貼り、乾いたら取替へて貼ること、治るまで繰返してよし。
- 一、桑吾（ツワブキ、ツハ、シハブキ）の陰乾にしたる葉を水につけて戻して貼ること。

コシケ (白帯下、赤帯下、消湯即ち寸白)

- 一、消渴にて尿道痛み小便不出にはケヅラの葉と甘草を煎し、多用して効あり。
- 一、寸白といふは關節レウマチス(慢性)のことなり。
- 一、ザクロの洗藥

○柘榴の樹皮五匁、古い壁土五匁、明礬少々を土瓶に入れ、水五合で三合になるまで濃く煎じ、其の上澄みをガーゼに浸し、腔内に挿入すると効あり。

- 一、千振（センブリ）の腰湯(三三〇頁参照)。
- 一、忍冬（スヒカヅラ、ニンドウ）の煎藥。
- 一、白水と芥子湯 芥子粉五匁を晒木綿に包んで口を結び、次に米の泔汁を釜に入れ、熱く沸かして鹽に取り芥子袋をその湯の中にて充分振り出し、適宜に湯を加へ、それで腰湯する。就寢前が一番よい。
- 一、蘇鐵の實一個を細く刻み一日量として分服。
- 一、大根の干葉湯。
- 一、ヨモギの葉を柔くもみて脱脂綿又はガーゼに包み、腔内へ入れる事。
- 一、猿の頭骨の霜を一回に耳かき一パイづつ六回ほど呑むこと。
- 一、近代的の洗滌、灸點は種々あり。
- 一、柿の核、同葉の二品を霜にして適宜白湯にてのむとよい。
- 一、赤白帯下あるときは酢漿草（カタバミ）の紫色の葉の分を一旦乾燥して煎用すると効あり。
- 一、赤白帯下の特效藥は 古梅干、松脂

右二品を霜とし、綿にマブして腔中に入れる。

一、蒜を適宜用ゆ。

一、白赤帶下を見る時の救急方法は

ニンニクを霜とし白湯にて呑む。ハコベの霜を酒にて服む。梅干を熱灰に入れムシ焼にして用ゆ。老麻(古麻)の霜と葛粉の二品を適宜白湯にて服む。

一、白赤帶下の妙藥

石灰五匁白茯苓一兩を粉とし水丸の梧子大となして毎回三十丸を白湯にて服めば著効あり。

一、消渴には蟬脫皮十五六個と甘草を煎汁として用ゆ。

一、辣蕪は精を養ひ、胃を助け、帶下の藥となる。

一、コシケを止める洋藥(カイカイ球 埃國のバイヤー會社製 東京市麴町區三ノ七齋藤滿平藥局)實に奇藥也。

一、コシケにはアケビの霜を用ゆると特効あり。故に、アケビ茶を常用すれば、コシケは無くなる。

聲 嘎 れ

一、蛞蝓(ナメクジ、石夾子)を一回一疋づつ生の儘嚥下す。

一、生姜と大根の搾汁を合せて呑めば即時に聲が出る也。

聲 の 出 る 藥

一、赤松の青葉を束ね、俎の上で金槌にてよく叩き、煎藥として服用すれば効あり。上品な味ではないがよい味也。(鼻をつまんで呑むとよい)

電氣療法の原理、オゾン療法

一、電氣凝固療法といふのは、高周波電流によつて生ずる高熱を利用して組織蛋白質を凝固せしめ、病的組織を破壊除去する方法なり。

一、オゾンは一名活性酸素と稱し、空氣を淨化し病菌を撲滅し、これを吸入すれば新陳代謝の旺

盛、増血、榮養と低抗力の増進に偉効あり。

溺死、假死、縊死

一、鶏冠を切りて出づる血を盃に四分の一ほど、假死人を仰向にして口中に注ぎ、水をつぎ込みてやれば、大抵はのどを越し蘇生するものなり。

一、酢を温めて鼻孔へ吹き込むべし。

一、生姜の汁を齒ぐきへぬるとよい。(手早く)

一、臍灸も有効なり。薬火を焚いて肛門をあぶるもよし。

以上は溺死人處置の場合なり。

一、縊死の時は繩を切るべからず、靜かに抱へて下ろし女には雄鶏のトサカの血を、男には雌鶏のトサカの血を服ませること。(吞ませ方は口をキセル様ものにてコチ開けて)

○朝より夕に至るものは蘇生ことあるも、夜より且に至るものは蘇生らず。

一、水に溺れたるもの、足の親指硬からず動くものは治し、動かざるは治せずといふ。

一、體温微かにても在り、且つ肛門哆開せざるを條件とす。

一、鶏の尿(糞の白い所)五匁を碎きて三合の酒にとき、口中に入れれば、忽ち縊死者は生もどる也。

一、傾死者には韭の汁を搾り、鼻孔に吹き入れ、且つ鶏冠の血を鼻孔に入れれば蘇生す。

癲 癩 (てんかん)

一、てんかんが若し發作さうな時は、早く鹽を小さじに一パイ位水にて飲むか、又は強く柱に抱きついて居れば起つても倒れることなし。

一、麻の實四合を水六合にて四合に煎じつめ、空腹時に三回位に服むとてんかん豫防となる。

一、てんかんは一〇〇ミリ以下の低血圧の時に起る。常に血圧が低いから常に腦貧血になつて失神するのである。

一、低血圧は高血圧で卒倒した時のやうに半身不隨などは起らず。

一、腦動脈硬化の高血圧で「てんかん」のやうな發作を起し、ケロリと治る癖の人もあるが、最

後には腦溢血を起すことあり。

〔てんかんの見ぬき方法〕

硝子を天眼鏡の如く二重にして、間に紅のときたる水を入れ、日向に出て其人の體を見れば、肩から腰の邊又は腕に色變りたる毒の凝りたるを見る也、其の毒の處を墨にて印をつけ置き、銅を以て深さ二寸ばかりの物を拵へ、其を押し當てて好焼酎を堪へらるる丈に熱く沸し、冷へたる時に布に浸し、取かへて押しあてる次々に皮膚が赤くなるなり、ちやうど漆にかぶれた如くなり、惡水出でて癒るなり。同じ事を幾度も繰り返すべし。

一、てんかん病人は一名を「テンコヤミ」ともいふ。

手を柔にする法

一、硼砂細末六瓦、グリスリン四分の三オンス、薔薇水八オンスを混じたものを、湯で洗つた後に塗りますと、手が必ず柔かになります。

癲狂人 (狂人)

〔人の見界へなきに〕

一、伏龍肝末匙を水にて一日に三回分用せしむ。

〔水火を知らざるに〕

一、間使に二十火灸せよ。

●以上二種の癲狂人共に

一、黒猫の頭を霜にし細末となし七日ほど本人に知らさず狂人の頭にふりかくべし。

一、猿の頭を乾晒して粉末となし、服用せしめて効ありといふ。

阿片 (モルヒネ)

飲酒事を滋し烟を吸ふは事を廢す。

●解烟癮方

火酒 二斤一五斤 上猪桂
川椒 四分 吳茱萸

川附子

東洋參

若し瀉下すれば加へる煨肉果若干を加ふ

右藥品一切を磁瓶中に装入し、人の烟癮の程度に依り、更に烟土を加へて三日間浸したる後、起らば即ち飲む。一杯より三杯に至て止む。

若し酒を忌まば、白湯の中へ此浸液一回分を落し入れ飲むも可なり。

又一方

製川附子

上猪桂

煨肉果

吳茱萸

川椒

白當歸

西黨參

焦冬朮

白茯苓

清甘草

大淮山

焦白芍

廣皮

製半夏

川芎

右五味を粉末とし、混和して粉薬と爲し服用せしむれば再び阿片を吸はんと思はず。

◎ 生阿片を食するもの解毒

丹礬（八分の粉末） 丹礬又は硫酸銅なり

白芥子（細を研末と爲し約そ二匙

右二つの粉末を熱湯に和し飲下す、若し吐することなくば清湯を以て飲む、胸に滿れば必ず吐すものなり。病者は其昏睡に任すことなく清水を以て洗面し常に醒寤せしむべし、更に吐するを俟ちて再び藥を飲ましむれば癮を緩ふして好結果を得るなり。

阿片の解説

阿片は精神病に鎮制及麻醉劑として内服、注射、灌腸及坐藥に古來其用甚だ廣し、(一)最も効果あるは鬱狂の初期にして其心痛を緩解し、或は其強迫觀念を去り頂期に至り劇性憂心あるに直接治効あり。(二)中酒狂、特に酒容譫妄之に次ぎ、(三)躁狂の治期、憤怒性刺戟性あるもの多し、即ち亦同一なり。

◎ 阿片の作用

(1) 大脳の麻痺の爲には、初は興奮し酪酊狀となるも、次で精神作用は鈍麻し、知覺は減退し、運動は制止され終に睡眠を來すべし。
(2) 之に次で研髓又麻痺し、呼吸中樞の麻痺の爲に呼吸淺薄徐々となり、終に靜止し、血管中樞の

痺麻の爲に血壓は減じ脈数は少く

(3) 大量は脊髄の反射を亢奮し痙攣を生ず。こは冷血動物に於ては實驗し得るも、人類にては之に先立て呼吸麻痺の爲に死するものなり。

(4) 其他腸の蠕動を鎮静し、瞳孔を縮少する的作用あり。

◎ 阿片の中毒

急性の中毒は自殺、毒殺、其他處方、調劑上の過失等より生ずるものにして、患者は昏睡し、瞳孔は強く縮少し、呼吸及脈搏は甚しく不良、全身冷却し、皮膚は蒼白となり、時に痙攣し終に心臓及呼吸麻痺して死す。

阿片の一〇—二〇「モルフィン」の〇・二—一〇・五は通常人に在りては致死量なり。

中毒者の手當は、吐劑茶「タンニン」等と與へ胃を洗滌し、興奮劑即ち樟腦「エーテル」「ストリピン」等を注射し身體の冷却を防ぎ、必要あらば人工呼吸を施すべし。反對藥「アトロピン」の皮下注射は尤も効あり其大量を反覆して用ゆべし。

慢性中毒は支那、臺灣等の喫烟(阿片)者に免れざる所にして「モルフィン」の皮下注射に習慣

となれる者亦同様の中毒に罹る。其症狀は嘔吐、便秘、或は下痢、衰弱、脱力、顔面蒼白、視力減退、記憶鈍麻、精神薄弱、頭痛、不眠、振顫、發熱、神經痛、憂鬱等數多の不快なる症狀は患者をして寸時の安寧をも得る能はざらしむべし之等は醫院にて嚴格なる監督の下に行ふを要す。

〔治療法〕 急激に阿片の服用を廢すると漸次之を減ずるとの二方法あり。

近來は「チオニン」「アンチモルフィン」「プルチン」「ニコリチン」樟腦等を用ひて奏効することあり。

〔應用〕

(一) 制瀉及腸鎮制用としては少量を急性腸カタル、赤痢、腹膜炎、腸出血、腹部切開後に用ひ、鎮制用として發揚性精神病者、神經衰弱(妄想ある)憂鬱症、酒容譫妄(不眠)等に用ゆ。是等内用の用量は〇・〇〇五—〇・〇一—〇・一(一回量)にして丸、散となし一日數回用ふ極量は一回〇・一五にして、一日〇・五なり。

(二) 裏急後重、子宮痙攣等に坐藥(〇・〇五—〇・一—二・〇)として用ゆ。製劑は阿片越幾斯、サフラン丁幾、阿片丁幾、阿片安息香丁幾、亞片吐根散等なり。

莫爾比涅

(モルヒネ)

罂粟の凡ての部分に含蓄せらる。

特に落花後未熟の莢果に切創を施して得たる乳塊即ち阿片中には尤も多く含まれ(藥用阿片には十乃至十二%)次にけし殻には〇・〇三乃至〇・一五%、種子には〇・〇〇五%あり。而して冷水には溶け難く性狀、短小、無色稜狀アルコールには好く溶く。

〔作用〕 腦髓中樞神經系に對する作用

腦髓の機能を減少せしむることは主要なる作用にして

末梢器官に對する作用

心臟は「モルヒネ」によりて犯さるることなし。

眼に對する作用 腸に對する作用 諸分泌に對する作用

〔應用〕 モルヒネ及阿片は醫家の一日も欠くべからざる必須の藥品なれども其効用は單に對症的

治療に過ぎず、而も弊害少からず、よく慣了作用及慢性中毒を招來するを以て、醫師は其濫用を慎むべし。

大人藥量 〇・〇一は小量 〇・〇二は中量 〇・〇三は大量

〇・〇五は確なる中毒量なり 〇・一は致死量なり。

〔中毒症狀〕

頭部充血、頭痛、惡心、嘔吐、全身倦怠、及び視野暗黒より始り嗜眠傾向を呈し、漸次睡眠深く昏眠状態となる。意識溷濁し鼾聲様呼吸を爲し、皮膚蒼白、瞳孔縮少、筋肉弛緩し、下顎下垂し、體温下降脈搏緩徐を伴ひ、死亡の轉歸は十乃至二十四時間の後に來るものにして、二三日昏睡状態に止まりて後に回復す。

〔療法〕

胃の内容物を排除すること。

モンヒンを酸化せしむる目的にて過「マンガ」酸加里の〇・四%溶液を約二十五立方センチメートル頓服せしむ。

尙心臓及呼吸衰弱に對しては尤も力を注ぐ可く羯布羅、依的兒、及亞篤魯必涅の皮下注射又
酸素吸入及顔面の冷水灌注等賞用せらる。其他症候的療法としては利尿を謀り、昏睡に陥る
を防がん爲に身體に絶へず動搖を與へ體温を暖にする等なり。

〔慢性モルヒネ中毒〕

症狀。凡ての分泌減少、著明なる腸障害。從て一般營養及神經、精神機能の衰弱なり。
身體障害、精神障害の二あり。

〔身體障害〕

唾液減少するを以て口腔乾燥し喝を訴ふ、齒は變形し脆弱となり弛緩脱落し、胃腸加答兒の爲
に嘔心嘔吐、食慾減損、消化緩慢となりて羸瘦貧血を呈し、常に便秘を伴ふ。皮膚は皮脂減少
し乾燥して光澤を失ひ薄弱となり、從て細菌に對する抵抗弱く容易く發疹、アクネ毛囊炎を
發し、殊にモルヒネの皮下注射は化膿し易く、其腕脚に於て多數の「アプセツス」及瘰癧の存
在することに依り慢性「モルヒネ」中毒患者たるを容易に診斷し得る位なり。毛髮及爪の如き
も脆弱となり脱色脱落す。生殖機能も著しく犯され、男子は陰萎、精液分泌遏止し、女子は

月經閉止し不妊を招來す。眼に於ては強き瞳孔縮少を特長とし時としては左右瞳孔の不同を見
ることあり。運動機能は手の振顫來り、共働變調筋力薄弱を見る。

〔精神界の障害〕

概言すれば、モルヒネに對する病的偏慾の爲に悖徳狂に似たる状態に陥り、驚く可き品性の墮
落を來すことあり。モルヒネを得るためには隠匿せんために、又は使用せん爲めには、窃盜詐
欺の奸智を行ひ、職業名譽及義務の觀念の如きは全く消滅することあり。

モルヒネ禁避現象

モルヒネ慣了後其使用を中止すれば八乃至十二時間内に不快なる感覺發現し、恐怖性を増し不
穩となり、女にはヒステリー症状を起し、著しき不眠症に罹りて數日間一睡を得ざることあり
更に重症のものには騒狂性譫妄を發することあり、肉體的には頑固なる噴嚏欠伸を以て始まり
分泌過多となり、鼻粘液、氣管支粘液、及涙液盛に流出し、瞳孔散大、聲は變調を呈し、神經
病其他種々の疼痛を發現す。殊に消化及營養の障害は著明にして常に劇烈なる下痢を起し、胃
腸の痙攣嘔吐を伴ひ急劇に羸瘦し、殊に脈搏稀弱不整となり心臓麻痺の傾向を示し、遂に之が

爲め覺るゝことあり、併し之等にモルヒネを與ふれば容易に直に緩解す。

〔療法〕

急劇的と徐々との二種あり。

◎急劇的のものは危険なるに依り輕症者に用ひらる。

◎徐々のものは

病者の苦痛多きを以て今其の中間を取る。即ち「エルレンマイエル」氏の方法にして即ち六乃至十二日に之を絶たしむるものにして、其間充分なる營養と溫浴をとらしめ、併發症には絶へず注意して若し虚脱の兆候現出せば直にモルヒネ注射(〇・〇二五)を注射す。十一十二分を経るも回復せざる時は豫後不良なるを以て、更に注射を反覆し同時に他の興奮劑を與ふべし。遂に呼吸中止來れば充分なる人工呼吸に移る。單純なる精神不穩は下劑により鎮靜し得可く、發揚譫妄に對してはモルヒネ注射を躊躇すべからず。嘔吐には先づ數時間食物を絶たしめ、氷塊を與ふるも尙ほ頑固なるときはモルヒネの注射を行ふ。禁忌現象時には、鎮痛劑として臭刺愛好せられ、睡眠劑としては莫比の代りに「トリオナール」を用ゆべし。

阿片、モルヒネ及び其鹽類 中毒治療新劑

並にコカイン、アルコール中毒、ニコチン中毒特效藥

アンチオピン錠

モルヒネ慢性中毒

福モナール

汗かき症 (多汗症)

一、外出に際し着衣前に、燒明礬一サジをぬるま湯で溶いたので手拭を絞つて拭くのです。汗の出を未然に防ぐ也。

一、股すれで困る人は、亞鉛華をコールドクリームかオリーブ油で練つたのを少量づつすり込み其上からタルカムパウダーで打つのです。

股ばかりでなく汗の特に多い箇所には、汗止めにもアセモにも効目があるなり。

蟻除け

- 一、脱脂綿で壺なり瓶なりの底を巾一寸位にグルツと捲き其上をゴムバンドで止めて上側を少し下へ折り曲げ、除虫菊粉をふりかけて置けば來らず。
- 一、鐵の錆水（古桶へ少し鹽水を入れ鐵屑を投入して錆水を作る）を烟でも庭でも蟻の居る場所へかければ、二三日で居なくなる。
- 一、植木の蟻には石灰。
- 一、畑地の蟻には普通の灰を穴へ入れると効あり。

記憶力増進藥

- 一、黒胡麻三十匁、燒鹽一匁、なつめ二匁、甘草六匁、人蔘一匁、桂皮二匁等を細粉して、鶏卵白味三個分と白砂糖五匁を加へてねり合せ、一回に二匁づゝ一日二回に服用すれば、二週日にして著しく記憶力を増す也。三日に一夜ねて澤山也。

胞衣下らず

- 一、蛆虫（尾長虫）五六疋を霜にして産婦に吞ませれば、即ち下るもの也。

逆産を正産に直すには

（流産癖）

- 一、錢を火にくべて燒き酒に入れ、酒のあたゝまりたる時にその酒を産婦に吞ましてよし、臍で正産するものなり。
- 一、産前産後手足の浮腫に、南瓜の種を焙りて煎じ、其汁をのめ。
- 一、流産癖を治すにはドクタミの根十匁、オホバコの根十匁（共に陰干にした物）を五合の水と共に一合に煎じ、冷えてはいかぬ。一日數回用ゆ。

足の裏の「石ア」

（足趾の骨肉間に炎症を起し痛む病）

- 一、赤牛の糞（新しきほどよし）を取り、又青石五個（掌の半分大、厚さ一寸位）を、よく燒き（赤くなるにも及ばず）其上へ赤牛糞を五分ほど乗せ、其蒸氣の上へ患足をのせてむすやうにすれば、足の表に汗が出て直ぐ治る。

寄生蟲 (虫下し)

一、發生原因は野菜から感染すること多く、経路は胃腸内で孵化し肝臓に入り、一定日の後靜脈に入り心臓又は肺に入り、咽喉を上つて又胃腸に下り腸に寄生する。

一、寄生蟲は好んで細孔内に入りたがる。

一、寄生蟲は害毒素を出す爲め貧血、胃腸障害、發育障害を起し、小兒は土を好みて食ひ(土や壁等を食ふ) てんかん様の發作を爲すことあり。

一、蛔蟲の驅除法

○蒜、はぶさう、どくだみ、いぬたで等を適宜煎用するとよい。

○一切の虫には、柘榴木皮の煎用と、樞の實を毎日食用するとよい。其油を毎日小匙に半分の

んでもよい。

○胡桃(くるみ)の實を生の儘食用してよい。

一、幼兒及小供の虫下しにはドクダミの葉、ニンドウの葉、ホウヅキの實を生にて食はせれば効

あり。同じく煎用するも効あり。

一、蠅虫を下すには大人量にて

柘榴の根の前汁(但し露根のこと)を頓用す。但し二三食休食して、虫のキラいな鹽ザケ、ニラ、ニンニクを食べて強らした後へ此煎汁を用ひて一氣に下すこと。

柘榴の根の前汁が不便なれば、右の如くキラいな菜を用ひた後に、ヒマシ油十五瓦を用ゆるも下る。

一、柘榴汁の製法

柘榴の根のホシタ物の内、火箸位のもの七八本二三寸位に切り(露根の少なるものを見計ひ)水二合に入れ一合五勺に文火で煎じつめ、後に冷やし毎食前一時間にのむ。

一、ニンニクを常食すれば根切りとなる。(蠅虫にニンニクの味噌焼)

一、十二指腸蟲には梅干を食せば(但し四、五日間毎食一、二個宛)害し得ざる程度まで弱らせることが出来る。

一、サナダムシの出來たのは、ソベ、草餅、團子を食するとよい。柘榴の根を煎じて一猪口宛一

日三回一週間ほど吞めば皆出て下る也。

一、蛔虫に、ニンニク一球を毎回食前に二日ほど用ゆること。

一、除蟲には五百倍位の昇汞水でふけばよい。

一、樞實はリモーネンにしてカムフェン、ピネン、カチネン及セスキテル、ペンアルコール、トルロールなどの成分を含有す。藥効は驅蟲藥即ち十二指腸蟲驅除、及夜尿症或は疝氣病等に焙焼して食用す、長く食用するを條件とする也。必可守。

一、蜂の巣一ト握りを二分し、其の一分を水二合にて一合に煎じ、二度(朝晝)に用ゆれば、寄生虫は大抵死して出る。

一、南瓜の種を一回十粒焼いて其仁を食へば、縲虫の驅除に大効あり。

指の腫れ (瘰癧外)

庇の咎め、疵より湯水入り其他にて、

一、乾鮓を粉末にし白砂糖を少し加へ、飯粒と混じ煉りて紙にのべ、痛む指に巻いてよし。

一、ミミズを洗ふて碎き飯粒とねり合せ、患部へつけてよし。

一、蝨をすりつぶして種油とねりつけてよし。(瘰癧同じ)

一、ナベスミと鳥もちを混ぜねり合せ、つけてよし。

一、梅干の肉を患部につけてよし。

一、鱈へ白砂糖をかけてつけてよし。

一、鱈を二つに割り皮の方をはりつけてよし。(瘰癧同じ)

一、蝸牛を押し潰し付けてよし。

一、山べ(ヒラベ)魚の皮を付けてよし。(瘰癧も同じ)

一、ヒキカエル、青カエルの皮をムキつけてよし。

眼病

一、淋毒の入りたる風眼は、水でよく洗ひ、入つた病毒を洗ひ落すより外はない。民間療法はこれより外はないから早く招醫。但し洗ふ水はよく濾過した清水のこと。

一、雀目(夜盲)には鰻の生肝をオブラートに包みて吞みてよい。他の鳥(鶏など)の肝の代用もよい。

一、疲れ目(眼の縁たぐれ)には葱の白根と小豆の砕いたのを等分に煎じて洗眼せよ。

一、ツキ目は赤ホウヅキの球を熱湯に浸しモミ出し洗眼してよい。また水仙の根をすり卸し絹にてこし水に溶き、その汁にて洗眼してよし。また水仙の根を霜粉にして人乳にて溶き點眼するとよい。

一、老人のカスミ眼は蜆の味噌汁を食べよ、又ニンニクを常食とするもよい。

一、目の一般的に何處となく悪い人は番茶を極く濃く煎じて洗へ、但し滓やゴミのかゝらぬやうにせよ。

一、目の悪い人はメギ(小葉、小鳥トマラズ)の葉を煎じて洗へ。(メギはコガネエンジュともいふ)

一、櫛の葉を水に浸し、其汁にて洗眼すれば、タダレ眼によし。

一、眼に稻の芒の入りたる人は茗荷の搾汁を差し入れてよし。(茗荷の莖根か又は子を搾りて濾すなり)

一、眼疣の生じたる時は、山椒の實の皮を去り一ト粒、病人に知らさぬやう吞ますべし。奇妙に治る。二つ出れば二粒三つ出れば三粒を吞ます。

一、ヨモギの實を取り煎用すれば目がはつきりとするなり。

一、夜盲症の人には、鶏の肝臓を煮食して効あり。

一、ケガ突き眼には、蠅の頭を三疋ほどすりつぶして乳にてとき目にさすべし。立所に治る事妙なり。

一、イタチ(獸)の眼球を傷けぬやうに干して置き、それを水につけた汁で突き目を洗へばトゲの出ること妙なり。

一、カミルレ、加密爾列(一名カミツレともいふ)の花を乾燥したものを濃く煎じ出して洗眼劑として大効がある。

一、鯖の膽を陰干して置き、赤目で痛むときに湯で溶き點眼するとよい。たゞれ目夜盲の時同上

一、物質にはオンペコの葉を焙つてはると二三日で治る。

一、俄かメクラとなつた時は、生姜の搾り汁を目にさすがよい。

- 一、眼に物が入つて出ない時には柚子の種を霜にし舌の上に置くとその出る事妙なり。
 - 一、逆マツゲを抜いた跡が痛むときには虱の中の黒い腸を取りて痛む所へつけければ治る。
 - 一、元來眼疾ある人は蒜を使用食用すべからず。
 - 一、鮎の腸の鹽辛は雀目に効あり。
 - 一、雀目(トリメ)には鶏冠の血を日に乾し、ジャ香少許を加へ、共に末(粉)としたものを煎用すべし。尙ほ此末を清水にて溶き内障眼を洗ふべし。
 - 一、雀目や病後の衰弱には八つ目鰻を味噌汁にして食用すべし。
 - 一、風眼の時は、蠶糞を煎じて其汁を點眼してよい。
 - 一、疲れ眼及タマレ眼はホウサン水で洗ふとよい。
 - 一、決明(エビス草)の種子を能く乾燥して煎服すれば熱を去り目を明かにする。
- (支那の藥書と云ふは此のエビス草のことなり)
- 一、點眼藥。 硫酸亞鉛 ○・三 クロルナトリウム 一・〇 蒸溜水 一〇〇・〇
- 以上を以て硼酸水で洗滌した後へ一二滴點眼する。

- 一、芒硝(一名朴硝といふ、硫酸ナトリウム)にて眼を洗へば、老眼でも壯眼となる。
- 一、麥粒腫(モノモライ)が化膿した頃合を見計ひ、ドクダメの葉を火で焙つて貼り繻帯をして置けば、一夜で膿を吸ひ出すなり。
- 一、トラホームは此頃はトラコーマといふ。

眼 (眩暈)

- 一、鳶尾(イチハツ)の根莖を乾燥して煎服すれば、下劑及吐劑として有効であるが、又眩暈を治する効がある。

耳 の 病

- 一、鮎を乾粉し、白砂糖を少し加へ、飯粒とねり合せ、紙にのべて患部に貼りてよし。



(イチハツ)

- 一、百足の油を耳中へつけてよし。(百足油製法は周知の通り油の小瓶の中へ百足を入れる)
- 一、鮎の腸を絹布にて絞り、其汁を少しづつ筆の尖にて耳孔内部へ入れること。
- 一、ドクダメの葉をよくもみて耳に栓して置くと、毒膿を吸ひ出し呉れる故に、四時間に一回替へる。

一、耳ダレの妙藥

○ホウサンで洗ふ。

○薊の葉の絞汁をさしてよし。

○卵の殻を霜にして、ゴマ油にて溶き、耳へ入れる。

○大根の卸し汁を紙捻につけて膿汁を洗ひ取り、其跡へ蟬のぬけ殻を粉にし、胡麻油又はヒマシ油にてねり脱脂綿につけて穴へつめて置き、一日四回取替へる。

○菊の花、葉共にもみ、その汁へ水すこし入れ、あたゝめて耳へさす。

○蓮根を霜にして少しづつ耳の孔へ入れる。

○雪の下の葉を搾つて入れる。(筆にてつける)

- 鱧の頭を霜にして飯粒にてねり、耳ダレで膿の出る方の耳のつけ根に外より貼付ける。
- ミミズを乾し細末して布に包み、耳をふさぐべし。
- 青蜜柑を霜にして絹に包み、耳の中へさし入るべし。

(ラシノキ)



第二章 藥草と救急秘方

- 一、耳の中の瘡には五倍子の粉をつけてよし。
- 一、耳の中が痛んで頭がガン／＼するときは、鮎の腸を絹布に包んで搾り、其汁を耳孔へさすこと。(鰻代用もよし)
- 一、イワナ(岩魚、ヒラベ)魚を焙り滴る脂肪を中耳炎の耳孔へつけてよし。
- 一、鯢(タツクリ)を霜にし押糊にてねり耳の後ろにはると良い。
- 一、耳ダレには田螺の霜を用ゆ。
- 一、中耳炎には芋藥を患耳の前後上下に貼る。

一、耳中の痛むには、ジャ香少許を綿に包み耳の中を塞ぐと、立所に癒る也。
 一、耳のウヅキ痛は、菊の花葉を少し水に入れて揉み、其汁を濃く出し、温めて耳に入れる。菊は乾貯品でもよし。

一、串柿(少量) 粳米(大量) 黑豆(中量)

右三品、粥に煮て食すれば耳のキコエザルコトなしといふ。

一、耳に虫の入りたるには、桃の生葉のしぼり汁、又は生姜のすり汁を二三滴耳に入れ、ば虫は出る、後は清水にて軽く洗ふてよし。

一、耳の病には、ヘビのヌケガラを綿にし、之を管にて吹き込めば立所に治る也。

一、雪の下は耳鳴りの妙薬なり。其の葉三四枚をよく洗ひ指の先にてもみ、青い汁が出たら其汁を一滴ほど耳孔へおとし込むべし。而して軽く脱脂綿で栓をして置き、これを毎日繰り返すと耳鳴は治る也。

一、中耳炎には、鱈を三枚に卸し皮のヌルくの方を患部に貼り上から繻帯して置き、一日一替すれば大に効あり。

一、鱈を霜にしてゴマ油にてねり、耳の附根に貼れば、中耳炎にきく也。

一、中耳炎には、耳の前後上下に蛭をつけ、吸血させてよいといふ。

一、耳の病(中耳炎其他漏膿)は雪の下の葉莖をもみ、其汁を耳孔中へ毎日一回づつたらし込みて置けば効あり。

一、耳だれには、鶏卵五ツばかりを割り鍋で炒りて油を作り、脱脂綿にしませて耳孔中へつめて置けばよい也。

心 臓 病 (狭心症を含む)

一、鯉の霜を一日二瓦づつ三回に分用して効あり。

一、生鰻を二、三尾竹筒に入れ、強火にて焙れば鰻の油と竹の油が混じて溜る。この油を少しづつ一日三回位吞むこと。

一、鈴蘭は心臓病の特効薬なり、又利尿劑なり。一日量十瓦を水四合と煎じ、半分になつたときに三四回に分服する。

- 一、濃番茶に醬油二、三滴を入れ毎朝吞むとよい。
- 一、石菖の葉根(手一足)を煎じて毎日三回用ゆれば浮腫を除いて全治する。但三十日間連用のこと。石菖とは水邊に生ずる宿根草也。
- 一、ドクダミの葉莖根を取り、乾して適宜茶の代りに常用すると効あり。
- 一、桑の根の外皮を去り白皮を適宜煎用すると効あり。
- 一、山桑(紫の葉の出るやうな桑が大吉)の葉莖や若芽を、番茶のやうに煎用すると大効あり。全治の實例は誠に多し。
- 一、車前草の實の前用は浮腫に大効あり。
- 一、福壽草の根の乾したのを壹匁に白砂糖を入れ、水二合を一合餘りに煎じて一日分とし三回に分用す。一週間吞めば四日休み又一週間吞む。此の日子は必ず守るべし。
- 一、スツポンの生血は心臓病に大効あり。
- 一、心臓病にはチキタリスの乾葉二分に肉桂一匁を加へて熱湯三合の中に浸し四、五時間の後に一回五匁づつ一日三、四回服用とよい。(此分量要注意)

(心臓病は風呂の熱いのは嚴禁のこと。温湯でも成るべく入らぬ方がよい。若し入るならば始めに胸全部に湯をかけてから槽に入ること)

- 一、屠獸場で屠りたての馬の生血を一回に茶碗一パイ服めばよい。十五日に一回づつ三、四度續ける。即ち全身輸血で心臓も丈夫になる也。
- 一、心臓病の人は、鮎を多用せよ。
- 一、鶏の膽を一日一個づつ用ゆれば、心臓病に効あり。
- 一、白色の鶏卵殻を粉末にして服用すれば、動悸烈しきは止まるなり。
- 一、繡眼兒(目白)の霜を耳カキ三パイづつ一日三回白湯にて用ひて、心臓病に効あり。
- 一、心臓病には鱒蛇(蝮なれば尙ほ可也)を乾燥して粉として一日量一寸位とモチ米の玄米一合とよく炒りて用ゆれば特効あり。
- 一、チキタリス葉の煎汁は心臓病に適藥也。其他腸チブス、急性リウマチス、産褥熱、肺炎、肋膜炎等に有効なるも、多量に用ゆれば頭痛、眩暈、嘔吐、痙攣が起る。適量は一回に〇・一乃至〇・二匁の乾葉を煎じ、又は粉末としたものを一日三回に分用。

一、心臓病には鶏卵の油が大効能があります。

卵油の取り方。玉子の黄身だけを取りフライ鍋に入れ、始めは餘り強くない火にかけ、絶へず杓子のやうな物で攪きませ、黄身が焼けて黒ずんで來たら火を強くする。

後にフライ鍋を傾けたり色々して、少しでも多く油を出してカスを捨てれば後へ油がのこる。其のとれた油は苦いからカプセル（膠囊）に入れて玉子壹個分で一日三回に用ひます。又心臓病は器質的のものとして神経性のものである。卵の油は神経性のものでよく利きます。

一、強心劑「チギタミン」といふ注射藥

此強心劑一瓦は檢定チキタリス葉〇・一瓦効力に相當す。

注射液は生理的食鹽水溶液となし、吸収迅速と疼痛の緩和を圖れる。

瘳せること

一、夏瘡にはラヂオ體操、庭木の手入れ、散歩、庭内掃除等運動して食慾を増進すること。

朝晝はアツサリしたものを食べ晝食は蛋白質や脂肪の入つたものに新鮮の野菜、果物をとれば

申分なく、又體の弱い人は午睡をとるとよい也。

狭心症

心臓の血管に痙攣を生じて、胸部に激い疼痛や壓迫又は絞窄さるるやうな苦しい感を覺ゆる時の病名が即ち狭心症である。

症状は疼痛 此の性質は壓迫様、灼熱様、牽引様、鑽りもみ様、板を張りつけた様。

發作時には、顔面皮膚蒼白、手足厥冷、脈膊細小、呼吸困難、チエーン・ストークス呼吸、冷汗、嘔吐、噁氣、流涎、尿意頻數、裏急後重等から、甚しきは眩暈、失神、昏迷に陥り、時には死亡することが尠くない。

一、強心劑とガマの油

ガマの油は主として頭部より出づるもエキス二三合分取るにはガマ何千頭が必要なりといふ。

霜やけ (凍傷)

一、耳の霜やけには、生薑の汁を温めて付てよし。

- 一、耳、顔、手足の霜やけには、大根の卸汁を度々つけてよし。
- 一、茄子の陰干した煮汁を霜やけにぬれば大効あり。

白雲頭

- 一、ヨモギの葉を煎じて其汁で洗ふか又は葉をよくもんでつけければ白雲頭に効あり。
- 一、白雲頭には蒜の卸汁をつけて効あり。
- 一、小燕を半分に切つて火中に投じ、やゝ熱した時に其汁を患部につける、不思議に治ります。

蕁麻疹 (ほろせ)

- 一、重曹を八十グラムほど一日三回食後に與へるか、又は一さじ宛四回與へる。若し夜間にのみ麻疹が出る時は、毎日日中に二回又は三回づつ二日間與へるとよい。

小兒病

- 一、小兒の疳の虫には「いぼた」(水臘樹)の虫が最適なり、埼玉縣には之を育てる人あり。

- 一、子供の疳には、イモリの黒焼粉を一週間内二本指でツマシグほど吞ませるとよい。
- 一、子供の疳や引つてに危急の場合は、雪の下の葉を搾り其汁を吞ませてよい。
- 引つけの場合は、葉を十枚ほど鹽でもみて汁を口中へしぼり込みてよい。

此時は手の横で延髓の上あたりを飲んでやると良いなり。

- 一、疳には身柱に灸して、其下へ二寸角に煙管のヤニをぬりつけ紙を當て、置けばよい。
- 一、疳にはクサギナの虫か蝸牛を霜にして白湯にて吞せる。
- 一、連錢草(カキドホシ)一名疳取草の葉莖を陰干して手一束を煎用してよく小兒の疳は治る也。
- 一、小兒の畢丸腫れには、蟬のぬけ殻を煎じ、洗ふべし。
- 一、チフテリヤには白屈菜の煎汁は効あり。また牛蒡はチフテリヤに大毒なり、母親も嚴禁す。
- 一、ハシカ病

小兒子供ハシカに罹つた時は、馬の爪を鯉節の如くけづり、其一匁を水一合にて煎じ盃一パイ(十歳の兒は二ハイ)を吞ませれば非常に熱が出るも翌日はケロリと治る。

- 一、小兒何事もなく死したる時は、葱の白味一本づつを、兩耳と肛門へさし入れて見るべし。蘇

生ずることあり。

一、小兒の頭でも體でもおできが出来た時は、豆腐を布でシボリ、其白味をおできの上へぬつて置けば治る也。

一、小兒のクサに鮒は大毒なり、母親にも嚴禁なり。

一、小兒の引きつけには、大豆(生大豆)をかみ碎き、其臭氣を小兒へ口移しに咽喉へ入れてやればよい。(其時舌をかまれぬやう注意のこと)

一、腦膜炎には雪の下がよい也。

一、智惠熱の出るには雪の下の汁が最適當也。

一、小兒のヨダレ多きには蝗の霜を服せるとよい、食するやうなら食はせてよい。

一、小兒の小便不通には、適當の葱を取り女兒は尿道に男兒は陰莖の穴へ各一分—二分位さし入れ吹くべし、葱の穴より小便出づるものなり。又田螺を臍穴の中へ入れ、上より紙をはつて置くも可也。

一、小兒陰莖腫には馬鞭草の葉を適宜煎じ、鳥の羽にて度々つけてやればよい。大きな子供には

ミミズ洗ひの法もあり。

一、小兒の肺炎には餅、餅の霜を服して大効あり。

一、小兒のこすり剥き(擦過傷)には、薪の火を石の上にてすりつぶし其灰をつけてよし。

一、疳には赤蛙のてり焼(足を取り腸をぬき火に炙り)て食るとよい。(乾いた物は一日一疋がよし)

一、疳には蝗を食はせる、蜂の子の焼藥、雪の下の搾汁、ニンクの汁を足の裏へ貼る等可也。

(ワウレン)



一、小兒の引付けた時は、手足を冷さぬやうにして暖める手當を爲し、尙ほ腕腸すればよし。

一、小兒の下痢には良熟の林檎を皮のまゝ卸して其汁を乳に交せて飲ませるか、又はお粥に混じて食べさせてよし。

一、小兒の便秘には蜂蜜を少しのませるとよい。

一、黄蓮(ワウレン、カクマグサ、ヤクマグサ)の煎汁を小兒(赤子)のマクリに吞ませると其子は瘡や丹

毒にかゝらない。亦痘やハシカが出ても輕し。

一、現に十歳の女兒が四歳の春から三ヶ月置きに就寝時から三十分間位ヒキツケたことあり。之等は「夜驚症」といふて晝間の恐ろしい出來事を夢見たか或は扁桃腺肥大の爲め呼吸困難か、或は蛔虫發生か、又は飯を食ひ過ぎた爲なり。

一、連錢草（カキドホシ、疳取草）の葉莖を陰乾して煎用すれば小兒の疳を治す。此草の成分は〇・〇三%の單寧及苦味質を含有す。小兒の疳を取る故に疳取草也。

一、疳眼といふのは醫學上にては角膜軟化症といひて、ハシカ、百日咳の後で栄養不良になつた場合、罹り易いもので、ビタミンの不足から眼の角質に穴がアキ、組織が軟化して遂に失明して仕舞ふのです。

植物成分と應用

一、萎んだ花を活かすには、アスピリン丸五粒を容器の中に入れ、ば直ぐに生き返る。

一、竹の植へ日は舊五月十三日に植替へること、枯れることなし、古來竹の本命日といふ。

一、松の木の枯れかけたのへ川芎の煎汁を與へると忽ち緑をふき返す。

一、漆工具が漆でくつついた時は、蟹のゆで汁で浸すと直ぐ剝離する。

一、大根は表皮に近い部分程ビタミンCが多い、葉には同Aが多いから、皮を剝かずに葉まで食へ。

一、カタバミ草は鏡、眞鍮、石器等を磨くに有効。

一、茗荷を食ふて馬鹿になるといふのは、茗荷にはニコチンとモルヒネの合ひの兒のやうな、アルカロイドを含有し、之を喰べると人體の知覺及感覺が往々麻酔状態となることありと。

（浦和高校で發表）

一、餅の微には赤い、青い、黄色等種々あるが、黒いカビは人體に害あり。

一、市井で朝鮮人蔘といふのは、實は桔梗の根が交ちつて居つたり、又はオタネ人蔘といふて日本内地の畑へ栽培した人蔘もある。

一、蕎麥粉は約一三・六%の蛋白質を含み、其中にはラルギニン、リヂン、ヒスチチン等人間の成長に必要なアミノ酸があると。（鳥取農高の武田博士はいへり）

一、茄子は元熱帯地方に野生植物であつたから、アトロピンと稱する有毒成分があつて到底食用にはならなかつたが、其後人工的に品種改良が行はれて来て、今日にては食用に毫も差支ない聲が囁れるなどと云ふのは一種の傳説に過ぎない。其證據には品種未改良の「キチガイナス」「ハシリドコロ」などは各一%のアトロピンを含んで居る（東京女子醫學專門學校の伊吹高峻教授の説）併し蒞は必ず取つて食ふこと、蒞には今も若干の毒分があるといひ得る也。

臭氣除け及驅蟲劑

- 一、シラエイ(ナツ水仙、鹿葱の類か)は糞虫を取るによい。
- 一、蒼朮(ヲケラ) 室内を乾燥し臭氣を去る。根は蚊遣りとなる。(燻燒)
- 一、苦蔘(クララ) 便所虫を殺し臭氣止め、ケジラメ取り。
- 一、椿の葉 同上。
- 一、薬や粉ガラ 燻して同上。
- 一、馬酔木(アセボ) ケジラミ、疥癬、牛馬のシラミ取り(牛馬には強過ぎて禿を作ることあり注意)

- 一、キハダ(黄蘗) 便所の蛆虫をも殺す、成るべく熱いを用ひてよし。
- 一、千振り 毛シラミ取り。
- 一、バラの花薔 此葉を下敷にすればのみ來らず。
- 一、タデ 毛シラミを取るには豆腐を用ゆ。
- 一、豆(大豆) 同上。
- 一、銀杏 同上。
- 一、ムクロジ 同上。
- 一、トリカブトの根 油虫除け。
- 一、石菖 ダニにつかれた時に用ゆ。
- 一、シキミ 鼠取りに用ゆ。
- 一、鶏のシラミ除 には朝顔の實を用ゆ。
- 一、イケマ(生馬) 馬の病氣に用ゆ。

- 一、お茶がら 防臭劑となり蛆虫殺になる。日光に乾してくすすれば蚊除けになる。
- 一、夏みかん 皮を便壺に入れ、ば臭氣止めとなる。
- 一、ウルシマケ には栗の生の木枝を番茶位に煎じて二三回洗ふてよし。
- 一、交讓木(ユヅリハ) 驅虫劑となる。
- 一、庭木盆栽等 の害虫驅除に馬酔木の葉を用ひてよい。
- 一、花ヒリの木 青中に投ずれば糞虫を殺す。
- 一、櫃の實 驅虫劑なり、一切の蛔虫を下す也。
- 一、蓮の花を一二瓣、飯櫃の中に入れて置けば、夏、飯の腐敗はなし。
- 一、粉炭を便所、芥箱、床下などに撒くと濕氣を取り悪臭を吸ひ殺菌作用あり(土バイ利用のこと)
- 一、ウンコウ(芸香、ヘンルーダ)の葉を床下に置くときは、蚤近寄らずといふ。
- 一、過マンガン酸加里約一匁を水四合に溶かして、便所其他有臭場所に撒布すると實によく効也
- 一、葛蔓(造林の大敵)除去には、鹽素酸加里二キロを水一斗一升到に混じ、用意の竹筒へ尖端をサラにした根株を浸して置くと、約一週間で葛自身の力で根先まで薬が廻り、全部枯死する。

(兵庫縣林業試験場實見報告)

- 一、カラムシ(麻代用品)の葉莖を便所に入れ、ば蛆虫は死ぬ。
- 一、肥料溜、便所蛆虫にはお茶がらを入れるとよいが、又一法にはウドの青葉を入れると完全に防げるものなり。

小便繁き時

- 一、山芋を多用せよ。
- 一、小麦粒を煎用してよし。
- 一、石持魚の頭にある石を削り、少量に用ひよ。
- 一、石持魚の頭の石は小便密閉を治す、又開胃消化力もあり。
- 一、草薺(トコロ)を乾粉して用ひよ。
- 一、蛇のぬけ殻は利尿に効あり。
- 一、足の裏を耐へ得るだけ炙りてよし。(火鉢の上に乗せるも可也)

- 一、香附子（ハマスゲ）を粉にし酒にてのむ。（出過ぎる人なり）
- 一、蝮の霜九匁、丁子の粉三匁の割合にて細分し、一日二回に一匁づつ吞む。
- 一、茅根（チガヤの根、シラカヤ、アマホ、ツバナ、オモヒグサ、ミチノシバクサ、ハマヲギ）の新鮮なるものを一匁—二匁を一日量として用ゆ。
- 一、イタドリ根は利尿劑なり。淋病、月經閉止にも大効あり。
- 一、カマキリを生のまま潰して押糊にねり下腹に貼りて小便繁きに効あり。

子宮病



（ハマスゲ）

- 一、子宮出血には竹茹、淡竹の若い竹皮（青竹即青皮を除いて）の白身を適宜煎用すれば止まる。
- 一、ハマスゲ（香附子）の根を乾燥し煎用する。（一匁子宮病）



（メハジキ）

- 一、益母草（メハジキ）の葉莖根の煎用は分泌物ある子宮内膜炎に効あり。
- 一、川芎（ランナクサ）の根莖を一回に一匁—三匁を煎じ一日量とす。
- 一、ドクダミ草を煎じて腔内を常に洗ふてよし
- 一、木槿の樹皮根を煎じてコシケを洗ふ。
- 一、夏枯草の全草を乾燥して煎用する。
- 一、陰門炎、腔炎、陰門搔痒症、コシケ等にはハマセリ（蛇林子、ハマニンジン）の乾粉末

- 一、を布片に包み、藁大にして腔内へ挿入す。
- 一、薑蕪と甘草を煎用して子宮病に効あり。
- 一、子宮痙攣には大根卸しの汁一盃と其一割の生姜の卸汁に醬油八匁ほど加へ吞むとよい。
- 一、四十雀（四十がら）の霜は大効あり。一日に三瓦乃至四瓦を三回に分用す。